パンフレット　NO. 23

婦人の地位は高まったか

婦人週間記念作文集

労働省婦人少年局

婦人の地位は高まつたか

——婦人週間記念作文集——

労働省婦人少年局

女性労働協会氏寄贈

はしがき

戦後婦人の法制上の地位は非常に高められましたが、実際の婦人の生活はどのように變つたでしまうか。

労働省では、第四回婦人週間（一九五二年四月）に当つて、日本放送協会の後援のもとに、「婦人の地位は高まつたか」というテーマで記念作文を全国から募集しました。

これに対して全国から二千通に近い応募作品が送られましたが、審査の結果入賞作品四篇、選外佳作四篇を表彰しました。そのうち入賞者には四月十五日東京の日比谷公会堂で行われた婦人週間中央大会席上で、自作を朗読していただきました。

この八篇と、選にはもれましたが興味深いと思われる作品二十九篇を選んでここに收錄しました。

これらの作品はそれぞれの生活の実感をとおして婦人の地位について意見をのべられたもので、婦人問題について多くの示唆をふくんでいると思いますので、沢山のかたがたによんでい

ただきたいと思います。

一九五三年七月

労働省婦人少年局長
藤田たき

凡　例

一、入選者は次の通りです。

第一部門　都市の家庭において

入賞者　東京　島影まち子

選外佳作　長野　宮坂悦子

第二部門　農村の家庭において

入賞者　静岡　塩川豊子

選外佳作　東京　村上信彦

第三部門　職場において

入賞者　新潟　藤井光枝

選外佳作　福岡　河野英子

第四部門　社会生活において

入賞者　東京　西峯三景

選外佳作　東京　駒尺喜美

一、部門別の応募者数

第一部門	都市の家庭において	二五一名
第二部門	農村の家庭において	六五二名
第三部門	職場において	一六九名
第四部門	社会生活において	四七八名
	一般について	二五二名
	その他	一五一名
	計	一九五三名

一、男女の応募者数

女	一四九一名
男	四四三名
不明	一九名
計	一九五三名

一、作品の配列は入賞作品、選外佳作以外は、必ずしも順位によりません。

一、作品の選者は左の通りです。

東京大学教授　宮沢俊義

作家　平林たい子

婦人少年問題審議会々長　神近市子

日本放送協会婦人課長　江上ふじ

労働省総務課長　富樫総一

同　婦人少年局長　藤田たき

目次

はしがき……三頁

第一部門　都市の家庭において

婦人の地位は高まつたか（入賞作品）……島影まち子……一二頁
私は女性の地位を低めている（選外佳作）……宮坂　悅子……一四頁
私達の場合……林　アキ子……一八頁
戦後の婦人の地位は向上したか……中尾　和子……二三頁
女性の地位は向上したか……金野　悅子……二五頁
婦人の地位は高まつたか……田代　節子……二九頁
婦人の地位は高まつたか……原田喜美子……三四頁
母親の特権……山田　住江……三七頁
婦人の地位は高まつたか……河野　種子……四〇頁
都市の家庭生活において婦人の地位は高まつたか……高林惠以子……四四頁

第二部門　農村の家庭において

女性の地位は向上したか（入賞作品）……塩川　豊子……四九頁
婦人の地位は高まつたか（選外佳作）……村上　信彦……五三頁
私たちの手……西山しげ子……五七頁
婦人の地位は高まつたか……新藤〃　鼎……六〇頁
婦人の地位は高まつたか……石倉　満吉……六四頁
婦人の地位は高まつたか……広瀬　正……七〇頁
婦人の地位は高まつたか……大谷たま子……七四頁
婦人の地位は高まつたか……平林　千代……七八頁
婦人の地位は向上したか……西岡　卓子……八一頁

第三部門　職場において

婦人の地位は高まつたか（入賞作品）……藤井　光枝……八六頁
婦人の地位は高まつたか（選外佳作）……河野　英子……九〇頁
婦人の地位は高まつたか……江野沢淑子……九四頁
職場における婦人の地位……駒尺　喜美……九七頁
女事務員の声……川原　泉……一〇三頁

婦人の地位は向上したか……大森　とし……一〇七頁
婦人の地位は高まつたか……（氏名不詳）……一一〇頁
職場に於ける婦人の地位は高まつたか……小林　富夫……一一三頁
婦人の地位は高まつたか……広瀬　正……一一六頁

第四部門　社会生活において

婦人の地位は高まつたか（入賞作品）……西峯　三景……一二一頁
社会生活に占める婦人の地位（選外佳作）……駒尺　喜美……一二五頁
婦人の地位は向上したか……豊崎　春野……一二九頁
婦人の地位は高くなつたか……高野とし子……一三三頁
婦人の地位は向上したか……藤岡マサ子……一三六頁
おなごの劫……古賀　禹子……一四〇頁
婦人の地位は高まつたか……藤村須美子……一四四頁
婦人の地位は高まつたか……飽田　二三……一四八頁
婦人の地位は高まつたか……眞田亀久代……一五三頁

第一部門　都市の家庭において

婦人の地位は高まつたか（入賞作品）

島影まち子
（東京都・主婦）

私達は毎日何気なく過していて、自分の地位が高まつたかどうかも気づかずにいますが、よく考えて見ると、いくらかでも、変化しつつあるといえると思います。

第一発言がとても自由になりました。女は今まで口数の多いのをひどくいましめられ、それが離縁の一つの條件になつた時代さえあつた程でしたから、自然いうべきこともいわず、その為ひどい不幸におち入つた女性も少なくなかつたようで、だからかりにも理窟めいた事などおくびにも出せなかつたわけでした。それが今は夫に向つて、「子供が一人増えたのですから、あなたも煙草を半分減らして下さい。子供が産れたのは私一人の責任じゃないのですもの。妻だけが犠牲になるのは間違つていると思います。」等と遠慮なしにいえて、もし頭ごなしに「夫

に向つて何だ！」等とどなられでもしたら、「あなたは随分封建的ですね。」と堂々といえます。

これも私達の背後に民主主義という大きな後楯があつてこそ始めて出来る事で、だからこうした時代が思いがけずやつて来たのを、時々感謝するわけです。

妹の場合はこうでした。久しぶりに夫と映画を見に行くと、映写中度々赤ん坊がむづかつて、その都度廊下へ抱いて出なければならず、ゆつくり観るどころか筋さえろくに分らない始末なので、つい「来ない方がよつぽどよかつた。たまには代つて抱いて下さるかと思つたのに——」と恨みがましくいうと、夫は「主台、女は子供を持つたら、何か観ようなんて無理なんだ。」と平気なので、彼女は我慢出来ず「女だつて人間ですもの。楽しみがなくちや生きて行けないわ。」と抗弁し、夫も不気嫌になつて「子供を楽しみに生きりやいい。」と冷ややかです。そこで彼女はこんな風に申しました。「今まで女は子供だけを唯一の楽しみに生きて来ました。でもそれが間違いの元なのです。子供は母親の娯楽品じやありません。だから楽しみに育てるなんてことは許されないのです。子供の人格を尊重して、唯幸福になるように務めるとしたら、子供を持つ事は女性にとつて実に大きな負担です。」

それから間もなく夫は、月に一回は子供の守りをし乍ら留守番をしてくれるようになり、お

かげで妹は心ゆくまで映画を楽しめるとの事です。これは家庭に言論の自由があつて、やはり女の意見でも正しければ立派に通るものだという証拠だろうと思います。

言葉の自由は結局行為の自由を産むものらしく、先日実家の母がやつてきて、「S子（兄嫁）はこの頃毎食自分だけ卵を喰べるんだよ。そして『お姑さん、私姙娠してますから栄養をつけなければなりません。』つてこうなのさ。」と不満そうに申しました。私もつい感情的に母に同情して、ふと悪口が出かかるのをすぐ気がついて、「でもお母さん、義姉さんのいうのは正しいのよ。家族の全部につける余裕のない場合には、生れてくる子供の健康のために姙婦だけでも滋養をとるのは義務ですもの。それに年寄はそんなに栄養いらないし——」と母をたしなめたのでした。全くほんの六、七年前まで、自分の子供よりも夫の両親を大切にしなければ世のそしりが恐しかつた嫁の立場を考えると夢のようです。「私達は姑に仕えた。それなのに今になつて又この年で嫁に仕えなければならない。」と嘆くこうした老いた母の姿に、過去に於て固い封建性の殻の中に犠牲と忍従の長い月日を送つた日本女性の不幸そのものを見る思いでした。

それだけに又友人の一人である日子の行為は華々しく目覚ましいものに感じました。彼女は「私の再婚をとやかくいえる者がもしあるとしたら、それは霧葉の蔭の夫だけでしよう。私は

T家の嫁ではなく、勿論T家一族の所有物でもなく、唯Tの妻でした。だから未亡人となつた今、結婚の自由は私自身にあるので、誰の干渉も受ける筈はありません。」と親戚中に公開状を放つて、絶交されてもひるみませんでした。

このように若い世代の婦人が多少行き過ぎはあつたとしても、ともかくもいくらかでも前進しつつあること、即ちその地位を高めようとしている事は、やはり女性達の為ばかりでなく、日本自体にとつても喜ばしい事だと思います。それだけに最近しきりに復古調などといつて、過去を懐かしむ思想がよみがえつたりしてくると、折角獲得した新しい女性の地位が容易にくずされて了いそうで仕方がありません。それというのもその地盤が余りにもろいように感じられてならないからです。こうした不安をのぞくには、何といつても女性自身の確固とした自覚こそ最も必要なので、それを守るのは、男性の反省であり、教養だろうと思います。

私は女性の地位を低めている（選外佳作）

宮坂悦子

（長野県・主婦・二二才）

何気なくのぞいた店頭に、ないと直感すると、急に眞劍になつて奥の方に目をやる自分の姿がおかしくもあり哀れでもあつて、一人で赤面してしまう。もう三月も半ば、季節に敏感な洋装店が、冬から春への衣更をするのは当然であるのに、まるで一大事が起つた様に……いつまでも買えもしないあの布地に未練があつて……これでやつと諦がついたとほつとしたような、それでいて妙に寂しい気持が私の体を通つてゆく。この洋装店に並べられたいくつかの布地のうちのグレイのウール地が私の暮からの願望だつた。数年にわたるオフィス生活で眞冬でも殆どスカートで過して来た私は、ズボンと云つては薄いサージとセルの仕立直し位しか持つていない。が、こうして結婚して家事に追われていると、一寸買物にゆくにも一々スカートにストッキングと云うわけにはゆかない。それがあの店頭のグレイのウールを見染めてから、あれでズボンを作りたいと、そればかりを希うようになつた。

お正月、御年始の帰りだつたか、夫に言うと、「君にまかせてあるのだもの、サラリーをやりくりして買うさ。」とあつさり言われると、何だか戸惑つてしまつて、忘れる日とてないくせに決心がつかず、ついのび〳〵になつてしまつていた。生活費に追われて余裕がないと言うわけでもなかつた。年老いた祖母と夫との三人のつゝましい暮しでも家は自分の家だし、いく

らかの貯金もあるし、夫のサラリーでどんなにでもやり繰りは出来るのだが……。何故？　こう考えて見るとこのズボンの事ばかりではない。生来、甘党の私は勤めていた時、何かと言うとおいしいお菓子を少しづつ買つて食べた。まして此の頃、色とり〴〵の美しいお菓子のウインドに目が止ると、たまらない食慾に襲われ、よほど買おうとするのだが、まだ買つたことがない。此の頃では、あのうちかの子とドーナツとを切ないまでの希いになつているのにどうしても買えない。わずか数ケ月しか経つていないのに、結婚して自分で経済のやりくりをすると、こんなにも吝嗇になるのかしらと人知れず呆れているのだが、不思議なことに、夫の晩酌のお酒など何の躊躇もなく一升瓶をかゝえて酒屋さんにゆける。お菓子の少しに比べたら遙に贅沢品である筈なのに……。　自分の欲しいもの悉く犠牲にする程、私は夫を愛しているのだろうか？　愛してはいるけれど、まさか……それだけではない。じゃ？　と思い至る時、私ははつとする。いつの間に芽生えたのだろうこの卑窟な心。私は夫に養つて貰つている！　と言う私だけなのだろうか。こんな気持を持つているのは、私は夫が社会で働くと同様に妻が家を護ると云うことは立派な務めだと信じて役所を止めた筈だつた。勿論、夫の強い主張もあつて。じや、夫はこうして段々卑窟になつて夫に慣らされてゆく女の習性の如きものを計算に入れてい

たのだろうか？　そんな夫ではない筈だ、いやしくも組合活動を通じて愛し合つた私達だもの……。たゞ通勤の困難さと老祖母の面倒をと云う、それだけの理由であつた筈……。一体それでは何によつてそんな卑窟な心が芽生えたのか。社会か、それも少しある。夫の横暴さか、それもほんのちよぴりある。それより増して大きく支配しているものは私自身の気持なのだ。夫と同じ値打のある仕事と自覚しているくせに、目の前に現れる具体的な、即ち金銭によつて私は自分自身の地位を低めている。この二、三年、労働組合運動を通じて得たものは何だつたのか。男女同権であれ、女性の地位の向上を計れ、女性を雑用に使うな、等々、声を大にして叫んだことは、一体何も根拠のないものだつたのか？　結婚してわずか半年しか経つていないのに、一日中雑用とおかずの心配ばかりしている、あまりに一般的な女でしかない私は、とうとうこんな卑窟な考えまで持つようになつたのか？　もしこれが私が今迄通り勤めていたとしたら、朝七時に家を出、夕方六時半に家に帰るあけくれで、夕餉の仕度から夫の身の廻り、そして自分のことと、もしやり得たとしても、それは不満足極まるであろう。そんな時、男女平等であると云つても、私が勤めている為に夫に充分な事をしてやれないと、頭を下げるのは私即ち女性であろう。いゝえ、貴女は女の仕事を立派にしていらつしやるのだから少しも卑窟にな

る事はないと、励まして下さる方もあるであろう。けれど私自身今の気持から云うと、何か十以上の仕事でもしない限り割切れないのである。即ち家事の外に金銭化されるもの。

婦人の地位の向上が叫ばれている今日、私のような考え方を持つた女は救われがたいのであろうか。生活にゆとりがあつたら、自分の必要なもの位は、時に応じて買えるような主婦になれることを私は望んで止まない。

私達の場合

林　アキ子
（東京都）

こんな筈ではなかつたのに……と思い、結婚なんかしない方がよかつた……と思うことが月に二三回はある。

男女同権、自由平等などは表看板だけで、一歩踏み込んだところには、まだ〳〵封建思想が充満している。

男尊女卑は、鹿児島や熊本だけではない。東京のまん中、鉄筋コンクリートのアパートで、

ベットに寝、コーヒーとハムエッグとトーストの朝食、ガスストーブの前で洋書を読み乍ら、

「オイ、オーバーを取つて呉れ、鞄はどこだ、靴はみがいてあるか……。」

そして、何処へゆくとか、何時頃帰るとも云わないで外出する夫なのである。

夫の足音が階段の下に消えるとほつとする。書籍、ノート、万年筆、新聞からめがねさては着更えたシャツ、クツ下等々部屋いつぱいに散らかつている。思わずため息が出る。書物の置場、順序を間違えると怒鳴りつけられる、といつて、一間きりのアパートにこのまゝではどうにもならない。

お茶でも飲んでからゆつくり片つけましよう……と、一番上等の椅子にどつかり坐る。

ラジオのスイッチを入れる。

「おしやれ手帖」河野鷹思氏の服装の話をぼんやりと聞いている。

結婚して約十年。まだ一枚の着物も、一足の靴も新調したことのない妻には、縁遠い話ではあるが、やはり女にとつてはおしやれというものに大きい魅力を感じる。

色彩構成を……、全体の調和が……戦災ですつかりなくしてしまつて、あちらから一枚、こちらから一枚ともらい集めたものでは調和しないのが当然である。染めかえ、つゞくり、はぎ

合せてやつと手を通している妻の衣生活にひきかえ、夫の服装はどうであろうか。
月賦の洋服代、靴代、Yシャツ代は僅かな生活費の中を荒し廻つて、月給を頂いたその日からもうため息が出る有様。流行とまではゆかなくとも、人中へ出てはずかしくない服装、そしてはずかしくないポケットマネーの犠牲がいかに大きいかを知らぬ筈のないものを。
その上にまだ、酒代、煙草代、喫茶代よりもはるかに少ない副食費をやりくりして、どうにか次の月給日近くまでこぎつけた時、
「オイ、一寸煙草代をかして呉れ。」
默つて出す方が悪いことは知つているのだが、大きい声の出せないアパート生活である。
私は毎朝、一番に新聞の求職欄を眺める。
だが、無能な中年の女を働かせて呉れるところなど全々なし。
私も娘の頃には、茶、花、ピアノ、油絵と忙がしい程のおけいこをさせられた。が、しかしそれは嫁入り道具の一種であるためで、広く、浅く、箇條書きばかり多くても、大きく役立つものなど一つもない。そして人物プラス名門、物質が結婚の眼目であつた。
そしてそれらは、敗戦で全滅した。

デモクラシーは叫ばれ、婦人参政権は与えられた。

だが、現在の実状は――女の代議士と若い人達の『アブレゲール』『レディイファースト』こんなことを女性の向上だとは思えない。

私は望みます。

結婚に際して若い女の人達は、「玉の輿」など望まないでほしい。侍女や愛妾の生活は女性を向上させないであろう。「たのもしい人」や「生活力のある人」の人形になるよりも、自分も責任を持つて助けあいつゝの共同生活こそ、女性の向上を助けるものだと思う。と共に、結婚後も自分というものを大切にして、家庭の中の小さい幸福にだけ満足しないで、絶えず世界を見知してほしいと思う。

又子供を育てる場合、その環境、習慣がどれだけ大きく影響するかを考えてほしい。

封建的な時代に、二十年も三十年もの長い間古い型にはめられてきた既製の生活を変えることが如何にむずかしいかを私は体験した。しかし、あきらめてしまうことは出来ない。

無休無給の女中に等しい生活から少しでも浮び上ろうと努力だけはつゞけるつもりである。

戰後の婦人の地位は向上したか

中尾和子
（東京都・主婦・二四才）

二月もあと数日に押迫つた或朝、私はつやぶきんをかけながら主婦日記の時間に耳を傾けていました。放送後「戰後の婦人の地位は向上したかについて多くの立場の婦人からその意見をお寄せ下さい。」というお報せを耳にして、（今迄の私でしたら思つてもみなかつたことですのに）あゝ私も此頃感じていることを纒めてみましようと思つたのです。その思いつきに、あゝ私もやはり戰後多少とも進歩した一人ではないかと、ほのかな喜びと感激とを覺えたのです。

何故なら、凡そこれまでの婦人は、嫁しては姑、夫に仕え、家事雜用にのみ追われ、自分の意見を発表する等という機会も与えられず、よし与えられたとしても、発表出来るような人は特殊な才能に恵まれるとか、筆を持つ人達等に限られていたと云つても過言ではありませんから……。さて、そういう殼を私は私なりに破つて拙いペンを走らせることにしましよう。私がまだ獨身でいました頃結婚された友の一人がこんなことを申していました。「結婚した当時、必ら

ず私が家に居て、主人が帰ればすぐお箸を取るばかりにして居たものだから、この頃たまに外出から帰るのがおくれたり、お客様があつたりして支度が出来ていないと、とても御機嫌が悪いのよ。だから貴方も結婚したら始めからそういう事もあるということを旦那様に躾けておかなければ駄目よ。」と、この友達が云つたように、結婚すると主人本位で主婦はただもう一家の犠牲というような生活であり、今日に於ても万止むを得ないという理由の下に、このような生活を送つている主婦の方も決して数少くありません。唯毎日お掃除をし、お洗濯をし、つぎものを片づけ、やがて夕方帰つてくる主人の為に夕餉の支度を調える、そこにはまた女として妻としての、ほのかな喜びと幸があるとは申せ、唯それだけの繰返しとは何という消極的な生活でしよう。しかし、それは学生時代に夢みていたような結婚生活と現実が、余りにも大きな差を持つということではありません。限られた経済、間借り生活、庭のない明け暮れ、それらは今日の日本に於ては当然であり、かえつてそれらの簡易生活の便利さ故に、時間の余裕がこの消極的生活への疑問となり、私のような者にでも、外へ出る機会を与えて呉れたのですから、私は友人に紹介されて、色々この角度から必要とされる英語を学ぶ事に方針を立てたのです。一週に三回、月謝三百五拾円という数字は、私共サラリーマンにとつても決して無理な支

出ではありません。一寸した心がけや工夫が、この月謝にかえられることはむずかしいことではありません。さて喜び勇んだ私は主婦となつた現在、再び黒板の前に坐りました。そしてそこで私が発見致したことは、主婦の方達の意外に多かつたことです。この良き理解と協力を得た主婦達が、再び教場に相まみえて少しでも勉強しようとする心意気こそは、やはり戦後に於て婦人が向上しようとする努力の現れであることを思い、人知れず嬉しくも又力強く思つたのです。何でありましようとも、一つの目標を自覺して精進するということは、こんなにも楽しいものかとしみ〴〵思われる程、爾来、私は寒い雪の日も雨の日も張切つて勉強しています。二月の寒空の下に頬を紅潮させて、筆記したり、先生の説明に身を入れ、学生時代以来忘れていた消ゴムの匂い、チヨークの香り……あゝ私達は何時迄も何時迄も若くて居られるのです。年を重ねようとも各〻この心の持ち方に依つて、より若い人に負けぬ情熱も若さも持ち続けられるということは、何という喜びではありませんか。これは私個人のささやかながら、たのしい此頃の生活ですが、すでに幾人かの子供の母として、又止むを得ぬ理由のために家をあけられぬ主婦の方達、そして、やがてその仲間に入らねばならぬ今後の自分の在り方に思いを至る時、外へ出て学ぶことが許されないのでしたら、家に在つて能う限りの努力を致しましよう。

ラジオを聞くこと、新聞を読むこと、本を読むこと、……私共が心してラジオを聞き新聞を読み本を読む時、何と学ぶことの為になることの多いことでしよう。目まぐるしい迄に忙しい生活の中でも、つくろい物を手に、子供と共にラジオから流れる音楽を楽しみましよう。子供と共に歌いましよう。子供より拙くとも英語講座に子供と共に和しましよう。解ろうとする心、知りたいと希う精進、眼をしつかりと見開いて、私共の周囲の凡てからよりよきものを吸收しようとするひたむきな努力こそ、たとえそれが微々たるものでありましようとも、必ずそれが向上の礎となることを主婦となつた今日再認識します。荒廃した日本にも努力精進する者のみが知る向上への喜びと、幸せと、信念とを主婦の皆様とともにわかちたいと念じる次第です。

女性の地位は向上したか

——中年以上の家庭婦人の場合——

金野悦子
（宮城県）

十八の長男が十六の妹を顎で使いたがる。私は「T子だつて勉強もあるし、その上家の手伝いも、小さい者の守迄するんだから、お前迄が詰まらない用を頼まないで、自分で出来る事は自分でなさい。」と注意すると、「でもT子は女の癖に雑誌なんか読んでるから頼んだんだよ。お父さんなんか、お母さんが仕事中でもお構いなく用を言い付けるでしよう。」と答える。私は溜息をついて了う。全くその通りである。社会からは「女の癖に」と言う言葉が大分追放されたと思う。けれど、我家からは未だ〳〵追放されないでいる悲しい言葉である。長男が育つた頃は、日本は男尊女卑の時代、それに家族制度そのものが何と言つても男を重く見た。祖父母に甘やかされて母の私を、「これE子」と呼んで祖父母も不自然としなかつた子であつて見れば、六年の時終戦になつて民主主義になり、男女同権が叫ばれても、「三つ子の魂百迄」のたとえ通り、一たんお山の大将に祭り上げられた地位を、女も男も平等など、私が幾ら口で言つても効果が薄いわけである。まして不惑を過ぎた夫に於ておやである。

何処の主人も職場では一働きも二働きもしているには違いないのである。だから家庭に帰れば充分の休養を取らねばならないのは無論で、妻が夫の疲れを癒す責任はあるだろうけれど、二言目には「女なんか家に居て、呑気に亭主の汗水流した金を使つている」と口癖に言う。女

だつて決して呑気になんかして居られない時代である。一部の有閑夫人を除いたら、家庭の主婦程、苦労の絶えない立場はないと思う。殊に自由に産児調節の出来るようになつた現在と違い、多くの子を産み育てた中年夫人の苦労は言語に絶するものである。戦時中低下した子供達の体力増進の為にも、より高い栄養も与えねばならぬし、つくろつても〳〵追いつかぬ衣料、渦巻く社会悪から子供を守り教育して行く苦労、支出の割に収入の増えないやりくりの苦心、全く頭の痛くなるような毎日である。家庭の主婦には、労働基準法もない四六時中が生活との闘いである。主婦はこんなに千手観音の役目をしているのに、地位は殆んど旧態依然としている現状だと思う。職場では相当女性の立場が認められ、給与に、厚生施設に、生理休暇に、リクリエーションに随分考えられているのに、家庭の母親がどれ程解放されているかと思うと、情無くなつて了う。食わせられていると言う卑屈感を妻は此際捨てて了い度いと思う。妻は夫の立派な協力者であつて従属物ではない。又妻の協力なくして、良人は社会に出て充分な活動が出来ないものであると言うことを、認識して貰いたいと思う。そうすれば夫の所得は妻との共同作業による所得と見てよいのだから、妻自身の自覚は高まると思う。また経済的自立のないひけ目で良人の惰性を助長して、何時迄も亭主関白に奉つておくことが、家庭の民主化を妨

げ、妻の地位の向上の障害になることが理解されて来るであろう。

私は他の家庭の主婦の場合を聞いて見たら、殆んどの家庭が我家同様、相変らずの亭主関白だつたのには驚いた。しかも他の主婦達は、少しもそれを不合理としないし、むしろ甘んじて安んじていて、「私達は食わせられてるから、仕方が無いわ。」とあきらめているのである。これでは主婦の地位が上らないのは当然だと思つた。それに、長年の習慣通りの科学性のない家事の処理、迷信も絡んだ無意味な行事の繰返し、少しの暇があれば寄つて茶呑話、その話題が定まつて人の噂話や愚痴話、女の猜疑心や狭量を暴露した姿ではないか知ら？　時にはそれらの話題が、その場限りに終らずに余波を呼んで、他の人達を不幸にしたり傷けたり、同じ茶呑話にも生活を益し社会を明るくする楽しい話題が、何故選べないかと、私はこの頃始終反省するようになつた。

私はそれから生活の為に狭い殻に閉じ籠つていた心を少しづつ外に向け出した。自分達の生活と切離して社会の為を考えたことがあつたかしら？　与えられた選挙権は正しく行使したかしら？　日本の今の状勢を私は認識してるかしら？　生活に科学を取り入れてるかしら？　私は自問自答して見た。残念ながら答えは全部否だつた。私は男の水準に近づく為に今一生懸命

に勉強している。知合の主婦達が私を異端者扱いにする。私はもう苦痛ではなくなつた。急激な社会の変動のあおりを一番ひどく受けているのは、中年層の婦人であろう。多くの人が封建時代の姑に泣き、民主教育を受けている子供の教育に戸まどい、過渡期の渦に巻き込まれそうな中年層である。

この世を悪魔の棲家とするも、神のしろしめす平和な国とするも、かかつて主婦の力が大きいことを思えば、時代のすう勢の引揚げてくれる地位を望むよりも、自分で努力し尊敬される母、夫に頼られる妻となり度いのが私の切なる念願である。私は農漁村の主婦達があんまり低い地位に甘んじているのが、歯がゆくてならない。もつと強い自覚を持つて貰いたいと、女性の一人として望む者である。

婦人の地位は高まつたか

田代節子

（宮崎県・主婦・三二才）

乾いた洗濯物が微風に乗つて白く光る。餌をついばむ鶏の声、日当りの縁側で子供は積木に

余念が無い。春うらら、畠の葱も一雨ごとに伸びる。生への躍動と歡喜が綠に崩えて、青空にツン〳〵と。

「長閑な、この平和はどう、矢張り人生つて素晴しいんだわ。」もはや私の心は、疲れを取り戻しつつある。今迄だん〳〵すりへらしてきた、余裕のある微笑や、ふくらみの寛容等を。十年間、あくせくと子供を生み続け、始めの長女を死なし、三人の男子が現在ある。息つく暇の無い労働又労働。夫に不平や不満をぶちまけたつて、何も夫は少しも惡くはないのに。むしろ、私のような生来怠け癖のある無精な女を、決して、とがめたことも無いのに……会社で、へト〳〵に疲れ切つて帰つても赤ん坊がむずかつていると、私のやりかけの天ぷらの続きや、沢庵を切つてくれたりする。雨の降る日も傘さして三人の坊主を風呂に連れて行く。寝床は全部敷いてくれる。夜の片付けが遅くなると、自発的にさつさと皿洗いをやり、明日の米も仕込む。極めてスムースに、敏速に。私のように、くらり〳〵物を考えながら徹底しない遣り方とは違う。良い夫である。

この二月末、何時の誕生日も何一つお祝いが出来無いので、今度初めて一大奮発でサントリーウヰスキーを贈つた。感謝感激の極みと彼は合掌した。ただしウヰスキー瓶に。私は台所に逃げて行つた。何か日のぢーんとするような、強いものを覚えた。チビリ〳〵と楽しんで呑ん

でいる。今でも水屋の上で瓶は琥珀の液体をたたえている。長い人生。短いようにもあり、味気無いようにもあり、茫洋たるこの在り方、生きる営み、複雑である。

私の母は、手広く営んでいる呉服商に嫁いだのであるが、女中、下男、子守りを傭つていた。母は自分が一日中子供にしがみつかれて、お便所迄一緒に入つて行くような経験は持たない。人を使う気苦労も並大抵ではないと聞いたことはあつたが、——子供が六人いたが、母は何時も店に坐つて居て、暇の時には本を読んでいた姿が一番印象に残つていると、姉達は語つている。結構な御身分だつたと云いたい。少くとも、おさんどんでは無いだけでも。本が読めたと云うことだけでも。子供は、これでおしまいと定めて、私は夫に云つた。「三十五迄育児に専念、あとは子供と同じ位の何かを生み出したいの。」結婚前半の日記は朝鮮の土となつたが、後の五年間のこしかたをひもといて見ると、あるある！　涙の跡、ささやかな喜び、疑問、背信、虚無、ピエロの踊りのように、影と光りがもつれて——でも一歩〳〵何か目指したものには或程度迄近付けると云う過程を見つけ、希望を感じてきた。正に計画は実行の半ばである。具体的にどんな工合にと説明する前に、吐息のような古い追憶のかけらを。

雨の音しきりに、ひそやかに
これが現実よ
これがお前の結婚だよ
主人も疲れて寝ている
吾子二人同じ頬の血の色よ
いさかいて、反逆して、毒付いて
さてお前は何処へゆけるの
道は一つ、道は一つ
ぽつり〳〵と濡れ縁を鳴す
女の涙のしたたりのような雨の音
何も無い、何か慾しい
何か圧倒されたい
尾を引いている、又引きずつて
ボロ布のような結婚の生態……

今は違う。私には私の仕事がある。と云うと随分生意気だが、去年の夏から私も勉強を始めた。婦人雑誌の代りとして、好きな文学の講座を続けている。楽しくてたまらない。何一つ、まとまつたものを身に付けられないので、これだけに、しがみつきたい思いである。主人は私の為に原稿用紙を探してきてくれたりする。私の一番嬉しい時間は、その本を読む時、それで少しでも早く、少しでも多く、自分の時間を持ちたいので、朝、夜が明けると戦闘開始！　タッターターと機械作業の流れが始まる。掃除、洗濯、茶碗洗い——毎日、きちん〳〵とやつてたら、こちらも感情の動物であるから、たまつたもので無い。ミシンをかける日、大物を洗う日、押入れ、便所を念入り掃除する日、外出する日、気の向いた時、気の済むように、まとめてやりさえすればいい。夫はこう云つた。「家に居て、ラジオを聞いたり、本が読めたりお前の方が進んで行くよ。オヤと思うことが多くなつた。教えられてゆく。」一本望だと思つた。念願を達したのである。長男の学校教育も、全責任をもつて私は引受けている。生きてるものにそそぐ力はやり甲斐のあるものだ。

家の歴史は平凡ながら、仲々味のあるものである。

婦人の地位は高まつたか

原田喜美子
（東京都・主婦・四五才）

家庭婦人の地位は高まりつゝある

少女篇

生れ乍らに特別視される運命の、
彼女は丙午であつた。その故に、
女は三界に家なし。
男性はあらゆる点で女性に優れている。
の二ケ條をどしよう骨にたゝきこまれた。
そして女性として最高の学府と、
豊富な趣味を身に付けて成長した。

結婚篇

彼女は心の底の方にある心の芽を、
そつと隠して結婚した。
婚家には姑がいた。
毎日が掃除と食事と洗濯で完全に
消費された。
これではいけない。
彼女の心の芽が叫んだ。
黒檀の茶箪司の上には、拭いても〳〵
白い埃が降る。

余暇はあつても新聞を読む、
それだけのことがゆるされない
哀れな嫁の身の上であつた。
彼女は夜中にそつと文学書を読んだ。
それは、「后の位もものかわ。」と思う一時
であつた。
彼女は白色レグホンを飼い、草花を育てた。
花はとり〴〵に咲き競つた。
しかし、なぜか彼女は淋しかつた。

育児篇

子供が生れ、女中を雇つた。
子供が生れて、初めて彼女は育児の知識の
皆無な自分を知つた。
子供が病気をした。彼女は看病に対して
無知な自分を発見した。
女学校で何を習つたか。
これではいけない。
彼女は結婚する資格の無い自分をはつきり
知つたのである。

終戦後篇

姑は天命を全うし、子供は三人に増加し、
女中は去つた。
そして終戦を迎えた。
彼女は実質的に忙しい毎日を過したに
かゝわらず、新聞とラヂオに楽しみ、
何かにうちこむ時間の自由を得た。
彼女は立ち上つた。
洋裁の夜学に通いだした。

夜学を賛成しながらも、夫は夕食後すぐ
席を立つ彼女を白い目で見た。

生活的独立篇

彼女はこの時すでに四十の坂を二つ三つ
越していた。
夫の心の中にも新時代へのある心の葛藤が
起り始めていた。
主人と主婦の收入が混合して家計費に
消えてゆくこのごろ、
夫は彼女の発言をも肯定するにやぶさかで
なくなつた。
今や彼女は、長い〳〵冬眠状態から完全に
脱け出たのであつた。
長い一生を懸けた彼女の心の芽が、家庭の
土をたがやして、輝かしい太陽を見たので
あつた。

婦人参政権篇

婦人参政権が与えられたとたんに、婦人の
地位の高きに位していた婦人は、極く少数
であつた。しかし、目覚めた婦人達が、今
や、めり〳〵と春の若芽の萠え出るように
内部から音たてゝ自已を磨き出している。
これにつれて家庭婦人の地位も、日一日と
高められつゝある。と云つて決して過言で
はないであろう。

終結篇

省るに、
結婚当初に於て、彼女が自由な時間を持ち

得ていたら、彼女の人生絵巻も、もつと多彩なものになり得たであろう。

も早、これからの家庭の主婦に、決して〳〵この混沌時代を強いてはいけない。

母親の特權

山田住江
（大阪府）

前以ておことわり致しますが、私は子供をもつたことのない主婦です。だから世の母である方達からは、ヒガミから来る勝手な言分とお叱りを受けるかも知れません。しかし時にはこんな女の言分も聞いて頂いても良いのではないでしようか。また私は社會の多くの婦人の方を存じませんから極く身近な人だけを見ての判断で、非常に片寄つた見方しか出来ないと思います。しかし私の考え方が全部が全部間違つているとは思えませんが如何でしよう。

婦人の地位は高まつたかと言いますのに、私の知る狭い範囲に限り「否」と言わざるを得ません。中には勿論立派に地位の向上をなし遂げた方もありますが、そこでこの理由はと言いますのに、婦人自身の中にこれをはゞむ大きな要素があると思います。私はこれを母親の特權意

識から来ていると思うのです。

母親、これは立派な名前であります。子供を産んでから成長させる迄には涙ぐましい努力が必要でしょう。しかし何とこれを意識的、或は無意識的に誇示し利用している人の多いことでしょう。盛り場や乗物の中で、どんなに無礼なことや、他人の迷惑になることも、母親であると云うことのためにその儘通されて了うのです。又何かの集りの場合にも、この切札は利用されます。共同の仕事に労力を提供しようとする人の何と少いことでしょう。

母親は恐るべき特権階級です。そして他の特権階級と同じく自己陶酔の泥沼にはまり込んで了つています。多くの母親は子供を限りない母性愛を以て愛していると信じています。この眼を以て見れば、どんな手に負えない子も天使のように可愛く見えるのでしょう。そしてこの感情を押し附けられた他人こそは良い迷惑であります。子供をもたない者にとつては、子供の存在はしばしば大変に患わしく神経をいら立たせるものなのです。しかし母親は殆ど他人も同じように、何時でも子供が可愛くて仕方がないのだと思い込んでいるのです。

子供のいる家庭の主婦は、自然子供中心の生活をします。これは仕方のないことでしょうが、その視野迄子供のみに留つて了うことが多いのではないのでしょうか。従つて全ての判断

の基準は子供になり、自分の家庭の外には、社會が激しく動いて居り、そこには多くの大人達が、又他人の家庭があること迄、度外視して了う場合があります。

母親の名に依つて憶面もなく他人の中を押し渡つて行く婦人は、遂には自らさえその名にだまされている場合が多いようです。家庭内の清潔、整頓も、自身の身だしなみも、新聞やラジオやその他の読書も、又たま〳〵のリクリエーションも、果は睡眠に到る迄、子供のためにと言う言訳でなおざりにされています。嬰児期からの躾と、主婦自身の時間を尊重する観念さえあれば、こんな言訳は立たない筈ではないでしようか。実際に一番手のかゝると言われる時期の子供をもちながら、立派に自分自身を見失わない数人の婦人を身近に知つております。しかし「年齢の近い子供が多くいる場合は……」と言われるかも知れません。しかしこれは始から計画をたてゝ産めば良いことです。今なお「私は何人の子を産みました。」と誇らしげに言う人に逢うことがあります。何と馬鹿げたことでしよう。

私は子供をもつと云うことは、この世の最もぜい沢な道楽だと思つています。何故なら、他のことは王者の趣味と言われる切手は勿論、対象は凡て物であるからです。子供こそは唯一の人格をもつ、又限りなき未来への萠芽だからです。母親たる者は、子供に対する時絶対に良心

的でなければなりません。その故にこそ、眼を広く社会に世界に向けて、自己の人格向上に努めるべきではないでしようか。恐れずに子供の前に立てる母親が少しでも多くなれば、家庭の婦人はそれだけ向上して行くでしよう。母親は子供と共に未来の社会を創造して行くのです。ここにこそ母親の特権があるのだと思います。

婦人の地位は高まつたか

——都市の家庭において——

河野種子

（東京都・主婦・四四才）

新しい憲法によつて、婦人にも参政権が与えられ、女性も男子と同等の立場から、国の政治や地方の政治に自分の意志をあらわす権利をもつようになつたことは、日本婦人にとつては一大飛躍であつたと言えるのです。

このように、婦人の地位は法律や社会の制度の中では進歩してきたことはみとめられるのですが、婦人自身の物の考え方や、家庭生活の内容の点では、まだまだ古い封建的な殻からぬけ

切れないものが多いようです。

今ここでは都市の家庭における主婦の地位について考えて見たいと思いますが、その地位が高められたかを言う前に、先ず主婦自身が反省して見なければならないことは、家庭生活においても、社会生活においても、自分に与えられた自由と解放を責任を持つて本当に自分のものとして来た実績をもつているか、ということです。

三月上旬のＮＨＫ婦人の時間の放送で、評論家の清水幾太郎氏は、

「今度の行政協定について、ＮＨＫがこの問題をとり上げて街頭録音を行つた時も、六百人程の聽衆の中に婦人は僅かに四、五人しか見えなかつた。そしてその中の中年の婦人は、意見を聞かれた時に笑つて答えなかつたが、婦人の政治に対する関心のうすいことをこれ程情けなく思つたことはなかつた。」

と言われたが、私はこれを聞いていて、自分自身のことを言われたようで、深く反省させられたのでした。しかし清水氏が指摘されたように、婦人たちが全然政治に無関心だつたのではなく、終戦直後は一日も早く生活を立て直そうとして、真剣に自分たちの台所につながる政治には大きな関心を持つていたのですが、その後、次第に生活をとりもどしてくるに従つて、政治

に対する関心もうれてきたのだと考えられます。

これは何と言つても日本の婦人がかくとくした自由と権利が、婦人自身の強い自覚によつて生れでたものではなく、他から与えられたものであつたために、本物になるまでに育たなかつたのだと言えましよう。

その意味でも、私たちはもう一度、自分に与えられたものの価値と、責任を認識しなおさなければならない時だと思います。

よくPTAの集りにも、家の仕事に忙しくて時間がないからという理由で、主婦の出席が少いということをききますが、PTAの集りに出ていくための時間は、主婦自身が家庭内を合理化することによつて、自分の時間と労力の余裕をつくり出していかなければならないのだという自覚が足りないように思われます。又、私共日本の婦人は、とかく自分の子供や、自分の家庭中心の考えにとらわれて、同じなやみを持つている主婦同志が互いに助け合つていこうとする社会性にかけているところがあることも、反省しなければならないことでありましよう。

互いに忙しい主婦たちが考え合つて、子供たちの遊び場を共同でこしらえたり、近所の子供たちのよいしつけをするために、学校の休みを利用して子供会をひらいてやるなど、力を合せ

て身近かの問題を片づけていくことが、結局は自分の生活を向上させることになつていくことを考えていきたいと思います。

つまり自分が向上するためには、大衆の生活も向上していかなければならないのだという社会的な物の考え方をもつことです。尙、この外にもう一つ大切なことは、家族の理解と協力です。

私はそれについては、小学校に上る前の子供と、小学校にいつている子供たちのしつけを、家庭でももつときびしく行わなければならないことを痛切に感じます。

母親がPTAの集りにも出られないという理由の中にも、この子供のしつけの問題があり、言いかえれば、子供のしつけが母の地位を高める基ばんになるものだとも言えると思います。それは又、夫の場合も同じことが言えるのです。主婦自身がはつきりとした生活の目標を立てて、よい計画のもとに生活にはげんでいく時には、夫もまた家族の一員としての役割を果していことするのが当然です。

かしこい主婦は、自分ひとりで家庭の仕事を抱えこんでしまうことをせず、子供にも夫にもそれぞれにふさわしい役割をのこして、共に家庭をいとなむよろこびをあたえていくのです。

そしてその中から生れでた時間と労力を、更に家庭内を豊かにしていくために使つて、自分自身の向上も忘れないようにしたいものです。

いろいろとのべてまいりましたが、結局、主婦が社会や家庭においてその地位を高めていくことは、主婦自身が自分の与えられたものを本当に自分のものとするだけの実績をつんでいくことであると、私は考えるのです。

都市の家庭生活において婦人の地位は高まつたか

高林惠以子
（東京都・主婦・三〇才）

敗戦の混乱と絶望の中から、徐々にではあるが平静と希望を取戻して来た社会情勢と共に、都会の家庭生活も次第に諸般の形態を整えて来たように思われる。而して民主主義を謳われ、男女同権が叫ばれてから七年間、家庭の婦人の地位（主婦と総称される一般の形態に於て）は、幾分なりとも高まつているであろうか。これについての結論を先に述べるならば、それは漸次高まりつつはあるけれど、まだまだ改善され、向上されなくてはならない多くの問題を含んで

いると云うことである。

その原因に就いては種々の理由があるが、その各々を論ずべき紙数を持たない故、極く大まかに挙げて見る。先ず現在の家族制度は、矢張りその大きな障害となつていることは否めない。男性――夫が、眞に妻を自分のよりよき半身として尊敬もし、同等の立場で相談し、助言を求めるといつた態度の者が果してどの位居るであろうか。兎角夫は妻が家庭の外に向つて眼を放つことを喜ばず、外部と遮断したがる傾向があるが、之は妻をして家庭を省み、夫の仕事に理解をもち、子供の教育のために、より豊富な常識と正確な判断力を備えしむるために、決して賢明な態度ではないのである。

又、都会の家庭に於ても、現在は姑と嫁の関係は無視出来ない状態にあり、お互いに一個の女性であり乍ら、特別な響を持つ呼び名から来る先入観の殻の中に閉じ籠つて、新旧の良点を尊重し、わかち合おうとしないため、お互いがその地位を高めあう結果とは全く逆の結果となつている場合が多い。

次に社会全体から見ると、主婦の力はその行動する範囲から言つても発言権からみても、誠に微々たるものであり、これに対する社会の眼も、まだ〳〵理解と同情を示しているとは云え

ないけれど、これは主婦自らが、もつと深い関心をもつて社会の現実を見つめ、これに対処する態度を家庭生活そのものの上に築いて行くのでなくては、根本的に解決されない問題ではないかと思う。

以上、家庭の環境・社会状態は、互いに因となり果となつて主婦の立場に種々影響してはいるが、これら総ての原因の根本をなすものは、主婦自身の自覚の問題であることを特に強調したい。大多数の主婦達は、主として経済的理由に起因して、夫に依存する気持が非常に強い。主婦は家庭経済に関与するといつても専ら消費の面に限られ、これがともすればその立場を受動的にし、依頼心を助長していた。戦後の経済的変動は、主婦が積極的に収入の面に参与することを求め、又その必要を切実に感じてはいるが、精々が内職として家事の合間に僅かな収入をあげる程度であろう。かく収入の殆ど総てを夫に仰ぐ結果、夫の多少の横暴も黙従し、一家の問題についての発言がとかく弱いものとなつている。又、反面からいえば、そうした経済的のよりかかりが、精神的にも家庭の各面に於て向上をはかる如き意欲を失わしめ、発展的に物を考えることをせず、現状のその場限りの改善に甘んじ、自らをその小さな世界の中に埋もれさせてしまつているのである。

又、女性の中でも殊に主婦は政治・国際情勢・経済・社会等の諸問題に対し、非常に無関心であるといわれるのも、些細で煩雑な家庭の雑用に追われるのが精一杯で、それを乗り越えてより広い視野に立ち、正しい批判力をもつてそれらのことを良く見極め、その推移を家庭生活の上に敏感に反映させようとしない故であつて、これも主婦の立場を自ら狭い、低いものとならしめている原因であろう。

それでは日日繰返してなされる生活それ自体を、主婦達はどのように感じ眺めているのであろうか。炊事・掃除・洗濯等、取り立てて目立たぬ用事を遅滞なく運ぶことは勿論大切であり、与えられたこれらの仕事に主婦が忠実であることは、とりも直さず家庭に秩序と規律を齎すことである。然し、戦中戦後の混乱時代の数年の空白の時代を経た現在にも、日常煩瑣な仕事に言寄せて、進歩も向上もない精神生活を送ることに言い知れぬ物足りなさと不安と焦燥にかられている主婦達は、きつと数多くあるに違いない。何かしら心身を打込んで出来る仕事を通じて精神的・文化的な面を生活に取入れたら、その小さな営みは、どんなにか生活を豊かな味わいのあるものにするばかりでなく、やがて物量の各面に就て深く考え、これを批判し、正しい判断を下す上に役立つであろうし、与えられた日常の仕事にも、希望を以つて工夫し精進しよ

うとする心が自然に培われることになるのだと思う。眞の主婦の幸福とは、夫の懐に抱れて安易な地位や環境の中に安住し、平穏無事に毎日を送り迎えすることでなく、何か確りした拠のある仕事を通じて常に心に適度の緊張をもち、日日を新鮮な気持で生活して行くことにあるのではなかろうか。各人が心に感ずるささやかな幸福感と、更に実生活の中で得た豊富な体験を、社会生活のあらゆる観点の上に立つて、広やかな視野の中で実際的な叡智を養つて行く事こそ、家庭婦人の地位の向上に資する唯一最善の道であると信ずる。

第二部門　農村家庭において

女性の地位は向上したか（入賞作品）

塩川豊子
（静岡縣・主婦）

終戦後、私の住んでいる富士山麓のF市では、PTAの母親の集りで、戦後の混乱状態の中で子供の教育のために、どうしても母親の向上を計らなければならないとの話し合いから、子供の教育を中心とした婦人会が、文字通り末端からの盛上りで出来上つたのが、私が引揚げて三年目の昭和二十四年三月でした。

私の属するN支部は、F市唯一の農村です。私は在満時代満鉄幹部の主婦として、所謂消費だけの生活を続けていました。多くの女の人がそうであつたように主人が生活費を得、五人の子供の教育と家事に沒頭していました。

吾が子だけの教育、我家のみの生活、上役の御招待に着る変つた訪問着の心配を眞剣に考えていた溫床の如き毎日。その溫床がいかに女の半生を冬眠させていたものだつたかと云うことが、引揚げて生活苦に当面した時、始めて悪夢のように思われました。

主人のエンジニアとしての長い勉強と経験は一瞬に崩れ、老父と十四才を頭に五人の子供と夫婦の八人家族を養つてくれる仕事は、戦後の日本にはたやすくありませんでした。何をして見てもうまくなく、食糧事情は最悪。少しばかり残つていた田畑を開墾する以外食べる道もなく、米の木も知らない私や子供達でしたが、百姓を本業と決めたのです。

主人は農家の生れとは云え小学校の時きり家に居らず、学校の休暇に帰つて手伝う程度でしたが、生来のきかぬ気で在来の男衆に負けない気で夢中で働きました。色々の精神的の苦しみからか男性共通の性格だけのようになり、私が一生懸命手伝つても近所のおかみさんのように出来ないことが、封建的な土地柄とマッチして如何に都会育ちの女が非生産的だつたかと云うことをつくづく味わつたようです。

百姓の生活に入つて見ると、今までこれこそ女の仕事と思つて、しかも女中と二人がかりでして来た仕事が、全然考え直さなければならないということを知らされました。ここでは幼児

の教育は老母の仕事、母は乳を含せるだけ、拭き掃除も子供か老母、針仕事は雨の日か夜業、洗濯は暗い内、パジャマに小花の刺繍をしたこと等は夢の夢。そうして、コントロールも知らない内、翌年六〇〇匁余りの女児を分娩しました。

乳も出なくなり山羊乳其の他の人工栄養で、四時間立つと田んぼから帰つて乳を飲ませ、十カ月を寝かせて暮しました。子供の守りをしていられたということが贅沢なことだつたと云う事実を始めて知りました。月一度保健所だけはかかさず通い、発育のグラフをつけましたが、半年目頃から標準を越してほつと致しました。

田舎の暮しも三年目、男女が一緒に働いている化粧気一つない赤裸々の姿、今までの生活にはなかつた詩がそこにはあるような気がしてきました。涙でばかり見つめていた霊峰富士は、朝に夕べに共に起き共に寝てくれるような気が致してきました。こんな心の動きの時、始めに書きました婦人会の発足第一回の委員に選ばれました。何か農家の女の人で出来ない面でお役に立つこともあればと、引揚後始めて我を取戻したような元気になりました。詩のようなもの歌の如きもの、ペンの走るにまかせて書きました。良く休が続くと人にも云われ、我自らも朝寝床で腰をさすりながらも、神に感謝を捧げたい気持でした。

始めて会員が「婦人の日」を迎えた時には、ささやかな集りを持つてお話を聞いたり、めい〳〵人様の前で生れて始めて演芸をし合いました。女だけの集りを持つこと等なかつた農家で月一度の婦人常会、その時間を持つために前日は一層仕事を廻して、楽しんで集ります。N支部の愚作の歌を作り、小学校の音楽の先生に作曲して戴いて、皆さんで歌つてもらいました。平均年令四十才位の農家の主婦達が部落の公会堂に集つて、合唱している時、光明の見出す思いです。少しづつでも自分達の時間の持てるようになつたと云うこと、それがN支部の女の人の地位の向上の一歩ではないかと今は考えます。

その後支部は有能な支部長を得て発展し、四年目を迎えました。過る三月の十一日には、台所改善貯金を利用して台所見学をかね、一日近くの文化都市見学を致しました。エレベーターが始めての主婦が数人いて、デパートで上つたり下りたり笑い興じました。

引揚げ後満六年、まだ〳〵子供は育つ盛り、貧乏も盛りなれば、愚痴もこぼし会い、帰りの汽車にゆられ乍ら、女の人が生産力を持つと云うことの力強さを考えました。そうして時代の波にのり乍ら、自分自身で生みだす時間。それが女性の向上の一歩ではないかと、ほの〳〵とした気持ちで東海の車窓の麦の長さを目測するのでした。

婦人の地位は高まつたか（選外佳作）

――農村の家庭において――

村上信彦
（東京都）

トルストイ流の表現をかりれば、農村の生活はそれぞれに差がある。だが、農村の女の不幸はみな一様である。

その家の生活がある程度高いか低いか、地主であるか自作（もとの小作もふくめて）であるかによつて、幸福や不幸が決定されるほどにも、女の地位は達していない。「不如帰」の浪子は、都会では昔がたりと化したが、農村ではいまだに生きている。その封建制のふかい泥沼は、農村の女性問題のありかたや解決のしかたが都市の場合とちがうこと、ちがわねばならぬことを示している。

終戦後、女の地位は高まつたかの解答は、みる人の立場によつてかならずしも同一ではあるまいが、ひろく農村一般を対象にすれば、まだ楽観的な結論は簡単に出てこないはずである。

たとえば栃木縣那須村はいろいろのデータから生活および意識の点で全国農村の平均水準をしめすものと思われるのであるが、三年間にそこで蒐集した例をしらべてみると、都市の女性問題と共通点よりも相違点を多くもつている。

ある農家の長男が外地の出征から引揚げてきたとき、家のまえには家族全部が迎えにならんでいた。ただ長男の嫁だけが土間で藁打ちしていた。やがて長男をがこんだ父母弟妹が土間をよこぎつてイロリのまわりにあつまつたとき、はじめて嫁は頬かむりの手拭をとつて近づき、「おめでとうございます。」と頭をさげた。夫婦主従の観念はここに生きており、愛する表現すら家族の前では束縛されている。

また他の例では、親同志の間で子供の結婚話がすすめられ、決定寸前に当事者にわかつた。娘は一晩泣いて反対したが父親は聞き入れなかつた。樽入れといつて、ナコウドが縁固めの酒を持参した以上取り消すわけにいかないというのである。彼女は家出して伯父にたのんだ。「それは頑固すぎる。」という伯父の仲裁で結婚は中止になつたが、すぐ二度めの話が進められ、こんどは最初から相談したという形で娘の反対をゆるさなかつた。形式が民主的になつたというだけで、彼女は折合わねばならなかつたのである。

このような例は、結婚がいまだに家のためで個人の幸福のためでないことを物語つているが、それが特例でないのは、女が重要な労働力として期待されているからである。これは憲法や法律の改正だけでは解決できない日本農業の原始的構成と結びついている。しかし、女のはたらく力がつよく認められていることは本来は男女平等を維持する條件なので、それを歪めているのはやはり封建的家族制度である。ただ農村においては、均分相続制が有名無実となつているのでもわかるように、土地の分割が現実的にも心理的にも困難のため家父長権が根づよく残つており、個々の労働力が独立の評価をうけえないで全体として家長にれいぞくする結果となつている。したがつて、この封建関係にはたらき手の女を引き留めておくことは非常に便利であり、それがまた逆に家父長権を維持する力となつているだから。農村の女の地位を向上させるには都会のように単なる啓蒙だけでは足りず、法制上の改革ですら不十分なので、在来の日本の農業形態そのものの改革という広汎な問題につながらねばならないのである。

しかし、まだ一般的とはいえないが、女の自覚が徐々にひろまりつつあることも事実である。それは一部は農業協組や役場や青年團や小学校ではたらくようになつた女たち自身によるが、主として軍隊に入つて多少とも外界の空気にふれてきた青年たちによるのである。もちろ

んかれらはフエミニストではない。ただ在来の家のなかで妻と語らう機会をもつと確保したい欲望、またいままでのように家庭内の共通労働力（父や母に使役される場合をふくめて）でなく、独占しうる人間的な魅力を妻に求める気持がたしかに強くなつている。それが、一般のわかい娘たちに反映してきているのである。

男女同数の青年をあつめて座談会をひらいたとき、女たちの多くが、百姓以外の人と結婚したいとのべた。だがさらに突込んでゆくと、農業そのものよりも農家の大家族主義の重圧を嫌うので、単婚生活の可能性のある次三男との結婚ならいやでないことがわかつた。ここに微弱ながらも女に家庭農奴を要求する傳統への反抗がみられる。

結論として、農村の女の地位はまだおそろしく低い。だがその低さが、妻や恋人として物足りぬ気持を男に抱かせ、その不満が女を自覚させる交互作用がはじまつている。パスカルの「考える葦」には遠くとも、「感ずる葦」の段階には達しているのだ。そして私の信ずるところでは、これこそ彼女たちの地位を高める前提である。なぜなら、あらゆる事情が現実とかたく結びついている農村では、生活の中から生じたこの人間的な要求だけが保守的な空気のなかでも生き延びてゆくだろうからである。

私たちの手

西山しげこ
（島根縣）

私たちの手は太く、もう春だというのにヒビだらけだし、足もアカギレで、うつかりすると縫いものの糸がひつかかる。お白粉をつけるのは夏秋の村のお祭だけ、たまに結婚のお喜びやまたお悔みにあたると、クリームくらいはつける。

出雲の国でも高ウネ栽培の本場にあたるこの村の娘たちは、大の男と同じように一日に何千貫の田土を上げなければ、一人前のあつかいはされない。民主々義になつて、ゴムの長靴をはいて仕事する人が多くなつたけれども、老人のいる家ではそんなことはできない。機械化農業は遠い遠い夢。しゆうとしゆうとめに仕え、親の命令で嫁にいき、農繁期には一日二十時間はたらき、そして財布は男が持ち、魚一匹でも相談して買う。財布を女が持つのは、夫が養子の家だけ、それも珍らしい。

私の家のとなりは大阪から昔疎開してきた人。私がこんなことを話すと、奥さんが笑いまし

た。

「まあ、おかしいわ。うちらでお父さんが財布にぎつてたら、なんにも出けへんわ。それで、ようみんな辛抱してはる。」

「いいえ、みんな馴れていますけん。」

私は言つたけど、考えてみるとおかしい。

四年前のこと、やはり都会の人が隣にいた。大根つけの時期で、奥さんが台所、だんなさんは冷たい水の中で大根を洗つていた。村の人々は両方を笑つた。

「シリに敷かれているダンナ。女だてらに男に洗濯をさせる奥さん。おおかた飯もまんぞくに炊けんだら。」

二人うでを組んで歩いてる。子供たちは破れたキモノを着て、親は町へダンスに行く。いろいろなウワサの中で、だがこの一家は朗らかだつた。財布はやはり奥さんが持つていた。私たち農村家庭から見ると、疎開の人人はたしかに男女同権のように見えた。

新しい民法では、結婚は男女の合意だそうだけど、出雲の農村では私たち女の手が男に買われるのが結婚かも知れない。近所の結婚のお祝いにいく。

「いいお嫁さんが見えましたげで。」
「はあ、手間がありませんで、仕方なしにもらいました。」
たいてい、こんなあいさつ。
だから、いろんな悲劇が起る。子供ができるまで、籍は入れない。家の家風に合うようだから、正式に婚姻届。同時に出生届。「もし合わなかつたら、縁がなかつたと思つて、ちよつと里に帰つてくれ。」自殺した娘も一人二人ではない。この邊の風習で、「いつたん嫁に行つたからは辛抱が大切、死んでもうちの敷居はまたがせん。」こんなはなむけの言葉で親が送りだす。気が弱い娘は、どうしても辛抱できない時は、死ぬよりしようがない。徳川時代と同じような気がする。婦人の地位が高くなつたのは、都会の職業を持つている人やお嫁にいくまでの学校時代だけではないかしら。
だけど、年寄に言わすと、近ごろの若いもんは楽になつたとか。そう言えば、七十以上の人は長い一生の重労働で、腰が曲つたものが多い。眠つているうちが極楽だつた。それに比べれば近頃の若いもんは骨惜しみ、理屈だけが一人前、と年寄はいうが、私たちはそんなに仕合せかしら。

私はそう思えない。

私たち女の手は、重いくわをにぎり、炊事をし、子供を育て、しうとの肩をたたき、暗い台所でなるべく残りものを食べ、涙をふき、ヒビ、アカギレとなり、もしこんな生活がいやだつたとしても、行くとこがない。

婦人の地位は高まつたか

——農村の社會生活において——

新藤鼎

（東京都・農業・四五才）

一枚のグラフを眺めるとき、多くの人は大抵カーヴの高まつたところに目をうばわれる。しかし、いかに飛びぬけて高いピークがあつたにせよ、もしも低い部分が多いときは、そのグラフの示す平均値が低下することはいうまでもない。だから平均値を引上げるためには、一見しただけでは気づかれない低い部分を引上げなければならず、またそれがどれ位高まつているかを見ようとするときは、その低い部分に視点を置かなければならない。

農村婦人の地位がどれだけ高まつたかということを考える場合も、これと全く同じことがいえるのであつて、結局問題は山のとがつた部分ではなしに、むしろその裾野に当る一般婦人について考えなければならないということであろう。

ところが、今日農村婦人の社会生活における地位の高さを測定する指標として、その村の婦人がどれだけ公職についているかということを引き合いに出すことが常識になつている。つまり村会議員や、協同組合の役員や、さてはPTAの役員に婦人を多く出していればいる程、その村の婦人の地位が高いといわれているのである。これははじめに引用したグラフの例でいえば、ピークに相当する所で、私はむろん、これを無視しようとはしないが、単にそれだけで婦人の地位の高さを示そうとすることは早計でもあり、また危険であると思う。

公職についた婦人の中には、村に於ける婦人の地位の高まりが、自然に婦人を公職につかせた場合も絶無ではないだろう。しかし私の知るところでは、その多くが、戦後公職を追放された人たちの身代りであつたり、或は昔ながらの村の顔役の夫人であつたりする場合が非常に多いのである。しかも問題はそれだけにとどまるのでなく、婦人が公職についているということが、広く民主化の偽装に使われて、人々が安易にそれを本物と見まちがえる点に、大きな不安

があるのである。

さて、それでは山の裾野に当る部分のごく普通の婦人の地位はどれだけ高まつたかという点に進もう。この問に対しては、私は残念ながら否定的である。一時変則的に発展した派手な婦人解放の動きは、あたかも返り咲きのような賑やかさを呈したが、それらは間もなく萎えて、今日では逆コースをたどり出した感が強い。

では、何故そうなつたのであろうか。それは要するに彼女たちの経済的な地位が高まつていないからである。特に最近の金づまりによる農家の貧困が、これに拍車をかけて、むしろ婦人の地位の引下げが進んでいるとさえ云い得る。

一例をあげよう。村の婦人会で講演会等が行われるような場合、外装して会場に行く幾人かの婦人とは反対に、いつものような農良着を着て畑に行く多くの婦人たちがいる。これは昔と少しも変らない。

また私の知つている村の一部落に、戦後婦人たちが申し合わせて、自発的に婦人会をつくつて一時は活潑に活動した。そしてこの婦人会が発展して、村の婦人会にまで伸びるだろうと思つていたら、今ではこの動きを阻む村の保守勢力のために、新しい芽はつみとられて、上から

の婦人会に代替しようとしている。

この間、NHKから水道をひいた村という放送があつた。水に不自由な埼玉県の農村の婦人たちが、水道の出来たことを喜んでいる有様が目に浮ぶようであつたが、その中で一人の婦人は「これからは男の人と同じ位おそくまで畑で働ける。」といつていた。つまり、文化的な施設が、彼女たちを解放することでなく、より多くの労働を担わなければならないという宿命の中から、婦人の地位の高まりはあり得ないのである、

農村における婦人の地位の高まりをおさえているものとして家族制度の重圧をあげることは周知の通りである。私の村の多くの農家では、いわゆる「財布をにぎる」のは、大抵姑以上の婦人たちで、若い主婦たちには中々まわつてこない。いま若い婦人たちが、家を超えた社会的なつながりを持とうとするには、まずこの昔ながらの慣習につき当らなければならないのであるが、多くはこれをさけて伝統の中に埋没するというのが実状である。

農村婦人の地位を高めるには、生活改善をしなければならない。——これは農村の指導者が語る所である。然し村で生活改善を志したり、実行したりする程の農家は、少くとも中農以上の階層に属している。生活改善普及員が来て、改良風呂をつくつている一つの農家を取り巻く

多くの農家では、野天風呂に等しいものに甘んじている。だから生活改善を及第する一人の優等生の後には、多くの落第生が出来るというのが村の姿である。そしてこの落第生をくいとめることが出来ない限り、農村婦人の地位は向上の線を辿らないであろう。なぜなら、この貧しい婦人たちが、向上しようとする婦人の地位の足くびを、たえずおさえているからである。

婦人の地位は高まつたか

——農村の家庭にておいて——

石倉満吉
（島根縣）

屈従の一語につきていた女性の生活は、新憲法によつて参政権が与えられ、男女平等が規定されると云つた如く、長い間闇にとざされていた女性の生活の上にも、今明るい太陽が輝きはじめたのである。しかしそれだけで婦人の地位は果して高まつたであろうか？　なるほど一応制度の上では封建性が打破せられ、明るい民主々義の大理想によつて女性が解放され、その地位が向上したとは云え、実際問題としてはまだ途遠しの感がないでもない。特に農村婦人にお

いては、根強い農村社会の封建性によつてこれがははまれているいつわりない実情を痛感する。

昨年出雲簸川地方に封建的な家の重圧と労働過重にたえかねて、相次いで三人の人妻が自ら命を断つたといういたましい事件があつた。一人は二十二才、一人は四十三才のこの人妻たちは、いずれも生活力を持たない女性の立場の弱さをはげしくいゝのこしている。戦前ならおそらく女性の宿命としてあきらめたであろうが、戦後女性の地位を自覚したこれらの人妻たちは、一応古い家族制度に抗してはみたものの、依然として根強い封建的な重圧はあまりにもけわしく、女の力だけではどうすることもできず、思い余つて死の抗議となつたのであろう。出雲地方では嫁のことを今でも「テマ」と称しているところが少くない。「テマ」とは働き手のことである。息子の嫁としてよりも、むしろ一家の働き手としての地位しか与えないのである。これでは息子は自分の妻に対する愛情も家族の前では気がねをせねばならず、妻もまた夫の立場を察して万事控え目にならざるを得ない。朝早くから夜おそくまでこき使われ、病気をして寝込めば「うちの嫁は横着だ。」と隣近所にいゝふらされ、母乳不足でミルクを与えようとすれば、贅沢だときめつけられる。新聞を読むひまがあれば雑布の一枚でも縫えと小言を云われる。改正民法は家族制度にメスを加えたはずだが、これは條文の上だけのことで、実際の生活

上で、殊に農村の主婦たちの地位が果してどれだけ向上したかははなはだ疑わしい。講和條約発効によつて日本の民主化は一層進められるであろうが、いまだに嫁をとることを「デマ」をもらうと吹聴するような農村のあることは、民俗的な資料と珍しがつてばかりもいられないような気がする。

「農家の婦人労働はあまりにも苛酷すぎる。」という声は、よく私達が耳にする言葉である。いつたい農家の婦人達はどんな生活をしているのだろうか。私の村における「婦人を中心とした農家生活の実態調査」の一部である生活時間について、其の結果をみてみると、作業三三・三%、睡眠三〇・六%、炊事一四・一%、交際其の他九・五%、裁縫、洗濯七・五%、自由時間五・〇%になつており、最も多くの時間を充当しているのは作業の三三・三%であつて、家事に育児にと家庭にあるべきはずの主婦たちが如何に多くの時間、男にも勝る苛酷な労働を強いられているかが伺われる。調査時期であつた八月と云えばさほど農繁多忙の候というわけでもないから、これが春秋の農繁期には、もつと〳〵労働の時間が多くなるのは自明のことであろう。主婦が自由な自分自身の時間をもつのは一日の中一時間十二分という極く僅少なものであつて、全体の五%にすぎない。即ち就寝前の僅か一時間余りが自由に周囲の重圧から解放さ

れることの出来る時なのである。又「婦人の休養日がありますか？」との問に対して調査戸数二十六の中「あります。」と答えたのは七戸のみであつて、多くの家庭は年間を通じて婦人の休養日などは全然ないわけである。神社の祭礼や、お盆や、お正月でも男たちは御馳走をたらふく喰つて休養していても、主婦たちはやれ神仏だ、お客様だと平常よりなお一層の多忙さで立働かねばならない状態である。

かくの如く農村婦人の生活実態を見ると、昼は男にも勝る野良仕事に追われ、その上に炊事、裁縫、育児と二重三重の過重な労働に身をやつして働いている。そうして夜はくたくたになつているにもかかわらず、夜なべを強いられるのでは教養書など読むことは望むべくもないのである。婦人に参政権が与えられたからと云つて政治関心を持てと云われても、今のような生活を強要されていては無理な話である。このような余儀ない周囲の環境から婦人の地位の向上がはゞまれているのみならず、反面には又婦人自らの無自覚に基く問題も多いと思う。

「女が三人よればかしましい」と云う。井戸端会議、茶飲話し、雨の降る日の無駄話しはまだよいとしても、天気のよい日の多忙な時にお茶を出して半日も話しこんで、何時までたつてもきりのつかないのが婦人達の話しの特徴であり、そうして、その話題たるや、決つて人の悪口

と世間の噂話に相場が決つている。若い世代の女性が寄つて盛んに話している。「どんクリームや、白粉を使えば美しくなれるのか。」とか、「パーマネントのかけ方や、ルージュのぬり方をどうすればきれいになれるのだろうか？」などと。主婦達が話しているのを聞くと「Aさんの家はB村より此の間お嫁さんをもらわれ、そのお嫁さんが持つて来たのはたんすが何サオで、鏡台はどうの、花嫁衣裳が何枚で、披露宴にはこれ〳〵の費用がかゝつたそうな……」などと好き勝手な噂話に花を咲かせている。婦人達がお茶をのみながら政治・経済・文化等の話題や議論に熱中しているのを、未だかつて私の村に於て見たことも聞いたこともない。

一体、農家の婦人は後ばかり向いて歩いているのではないだろうか。「私の家は昔はどうだつたから今もこうしなければならない。」などと後の方にのみ気をとられ、現在の生活を少しも考えようとはしない。これで自分自身のよりよい生活を建設して、婦人の地位を高めることの出来ないのはいうまでもないことであろう。

新憲法ができてより五年有余、農村の家庭に於て婦人の地位は果して高まつたか？ 制度の上ではなるほど一応よいようにはみえても、実際生活の上では「未だ婦人の地位は高まつてはいない。」と言わざるを得ないだろう。

それでは如何にしたらよいのだろうか？　それには先ず婦人自身が男女平等の原則に立脚した自覚とプライドを持ち、常に教養を高め、智識を広めて、男性に劣らないまでに人格のレベルを向上さすことである。しかしながら如何に婦人の自覚があつても、農村の主婦たちが日々野良仕事に多忙であつて、時間上の余裕も精神上の余裕も持ち得ないようでは、婦人の地位の向上も政治的関心もあつたものではない。故に農村の家庭に於ける男性の理解が次に重要な問題になる。男性の温いおもいやりと理解によつて、婦人に時間的余裕だけでも与えることをしなくてはなるまいと感じさせられる。

これがためには、当然根本的な農業経営全般の改善と、農家経済のゆとりが問題となつてくるのであつて、農業経営が合理的に改善され、経済的にも豊かになつてこそはじめて文化的な生活も時間的な余裕も生れ、従つて、婦人の地位も高まつてくるものと信じて疑わないのである。

来る四月十日からはじまる「婦人週間」を機会に、一刻も早く新憲法の願つている大理想に到達したいために、いさゝか愚見を述べた次第である。

婦人の地位は高まつたか

——農村の家庭において——

広瀬　正
（新潟縣）

某誌四月号所載の、和田伝氏の「取引」という小説の中に、山鶴という百姓夫婦の描写が出て来る。それには、一人息子に戦死された後の、妻女の様子が次の様に描いてある。

「……息子に死なれて山鶴の妻女は見るうちに白毛となり、腰が抜けたようになつて野良へも出られなくなつた。……衰えるとなると速さがはげしく、あッという間に空気がぬけた風船みたいにちぢこまつてしまつた。」

牛馬のように肯めつぽう働き続けた女の、不意のショックによる急激な肉体の衰弱である。

「……よくしたもので、破けた風船みたいにちぢんでしまつた山鶴の妻女は、ほんとうのおふくろさんみたいに、二人の孫どもと別の部屋に寝ると、見て来たように人々は言い出した。……」

廃人同様になつた妻女は、夫と息子の嫁との不倫の関係にも、泣き寝入りせねばならなかつたのである。これを小説のそらごとゝ言い切れないのが、農村の家庭の現状ではあるまいか。民法が改正されようが、戸主の名称が筆頭者に変ろうが、依然家の代表者たる家父長の権力は絶対であり、婦人は家事や耕作に要する機械でしかない。殊に嫁ともなれば、その心労は格別である。未明の飯炊き仕事から、夜更けてベト〳〵に汚れたしまい湯の始末をするに至るまで、激しい労働の連続である。農業労働の上に家事労働が加重されるから、二重の負担にあえがねばならない。このことは、三十才以上の農村婦人の約五割が罹つていると言われる、農婦病の原因となつている。上述の山鶴の妻女が急激に衰えたのもこの農婦病の果てと考えられる。しかも彼女等には訴えるべき労働組合もなく、保護を受ける法律もない。全くの忍従の生活である。

昨年の七月、アナタハン島から帰還した十三名の今浦島の中、埼玉県出身の小高某の場合は、特に世の注目と同情とをひいた。彼の戦死の公報とゝもに、彼の妻は十いくつも年下の彼の弟と結婚させられ、その間に一子さえ生れていたからである。然しこうした事実は、それがたまたまアナタハン生き残りという特殊事情のため人の目をひいたが、農村では日常茶飯事と言つ

ていゝ位さらにある話である。婚家にとつて、中年の嫁は熟練した労働力であるから絶対必要である。もし生家に帰ろうとしても、生家は必要限度の労働力を確保して居り、行詰つた経済事情の下では、口をふやす事を許さない。従つてこのような不自然な結婚に甘んじていくより外ないのである。農村の婦人に結婚の自由のないことは、娘の場合も同様である。せつかく頭が良いからというので女学校へ入れて貰つた娘が、適当な婿がみつかつたという理由だけで、中途退学させられてしまうのはよくある例である。

婿取り機械に意志の自由など認められる筈がない。恋愛結婚などはどこかの国の夢物語にしかすぎないのである。

更に娘の身売りの問題がある。昔から娼妓、酌婦には東北の農村出が多いと言われているが、遊廓が特殊飲食店と名を変えた今日でも、人身売買は跡を絶つてはいない。昭和二十七年二月二十九日の衆議院行政監察特別委員会で、農業県である新潟県の場合を取上げた結果によると、地検で扱つた事件だけでも、廿六年には百十一件に達している。しかも係検事の証言によれば、「親が子を働かせて生活する考えが強く、娘はそれを親孝行だと考えている。」状態である。親に娘の人格を尊重する考えなど更になく、娘も亦自らの基本的人権に対する覚醒など全

くない、封建時代そのまゝの世界である。

農村婦人をこうした低い地位に置いている原因は何であろうか。農村の低文化と保守性、婦人の無自覚、それも事実であろう。然しそれを掘り下げると、現行の農業形態の非近代性と、農村の経済的逼迫という根本的な問題につき当つて来る。日本農業が徹底的に機械化、畜力化されて手が省けるようになれば、婦人はある程度農業労働から解放されて、家事労働の合理化を計つたり、向上の為の読書の時間を持つ余裕が生れるであろう。現に有名な岡山県の興除村のように、相当な成績をあげている処もある。農産物と工業生産物との価格が平均化され、農村経済が楽になれば、娘を売春婦につき落す親もいなくなるであろう。婦人問題は、農村全体が向上する事によつて、始めて解決され得るのである。

然しこうした困難の中にあつて、一部の自覚ある婦人達の手によつて、カマド改良運動等の地道な方面から、その地位の向上が企てられつゝあるのは、せめてもの喜ぶべき現象である。それらが実を結んで、全日本の農村婦人の地位が高まるのはいつの日であろうか。婦人参政権や、少数の婦人代議士、村長、農地委員の出現だけでは、農村の大衆婦人は救われないのである。

婦人の地位は高まつたか

大谷たま子
（東京都・主婦・四七才）

私の疎開していたのは東北のある農村地方ですが、この地方の婦人の地位は余りにも低いと思います。まず嫁さんの場合ですが、お嫁に迎えられて祝言がすむと、その家の不動産を貰うというためなのか、受つぐためなのか、あるいは食べるためなのか、婚家の人たちへのツトメはよういなものではありません。朝暗いうちに起きて御飯をたき、お姑さんが起きて来ると両手をついて、「お母さん、何しやんすか。」と言つて仕事を聞くのです。こうして一日中をお姑さんに仕事を聞きながら、野良で手元の見えなくなるまで働いて帰宅しますが、その間食事に帰宅すると、馬にカイバをやり、食事がすむと沢山のお茶碗を洗い、広い家では三十畳敷位の大きな台所の板の間を、一日三回にわたつて丁寧に拭くのです。こうして重労働の野良仕事をし、家の掃除をし、夜になると夜ナベまでするのですから、「体が続かないわ。」とこぼす嫁さんもあります。又は過労で健康を悪くする嫁さんもよくあるのです。この地方は雪国なので十

二月の初めには、雪が本格的に降ります。こうなると根雪といつて二三尺位の雪ががつちりとかたまつて、春三月末までは我が世とばかり広野にがんばつているのです。したがつて寒さもまた厳しいものです。寒中など私なんか炬燵にはいつたきり仕事など出来ません。こんな厳しい寒さに嫁さんは、よく麻糸をウムのです。みんなが炬燵にあたつているのに、嫁さん一人あたるどころか、板の間にボロなんか敷いて座り、麻ウミの仕事をして居ります。嫁さんだつて同じ人間ですもの、寒いのは同じことですから、さぞ炬燵が羨ましいことでしよう。そばで見ていて「炬燵におあたりなさい。」と言つてあげたい気持でいつぱいですが、お姑さんの前とて口へは出せず只同情するのみなのです。又嫁さんは、火の気のない馬小屋の土間にムシロを敷いてワラ仕事をするのです。長い冬の寒さにこうして仕事を続けますから、休の弱い嫁さんは病気になつて実家に行き、長い間静養していますと、「家の嫁は役に立たないから。」と言つてアトガマを入れるということなどをします。ですから嫁さんの立場は悲惨なものなのです。この地方の農家には、どこの家にもイロリがあるのですが、イロリの眞正面をヨコザといつて、その家の主人があたる場所とされています。どうかして主人でない人がヨコザにあたると、「米を買わされるよ。」などとヒヤカされるのです。イロリの廻りは板の間ですが、ヨコザ

の後の板の間は、嫁は歩くことを遠慮する所とされて居ります。ですからその反対側のキジリというところを歩くものとされて居ります。それで嫁さんはヨコザの後の板の間を拭くには、遠くの方から手を伸して拭いているのです。勿論ヨコザにあたることなどはせず、主人の寝間などへは必要でない限り出入りはするものでないとされて居ります。

このように一家の中で主人と嫁は、何かにつけて差別されて生活しているのですから、嫁さんの心遣いは大変なものなのでしょう。又嫁さんが子供を産む時は、実家へ行つて産みますが、お産の世話から赤ん坊の着物からお祝いまで、全部実家で致します。これは娘を持つ親の大きな負担ですが、お嫁にやる時は、一生着て余る程の着物を持たしてやり、又お嫁に行つてからも、季節毎の着物を作つてやるのですが、これは娘を少しでも大切にしておいてもらいたい親心なのでしょう。こんな風ですので、この地方の云い習しに「娘三人持てば、カマドがカヘル。」と言われているのです。つまりお金が沢山かゝるので貧乏になつてしまうということなのです。又嫁さんは婚家が多忙なので、子供の着物や自分の仕事着は実家へ泊りに行つた時に縫つて来るのです。

この地方ではお客様のもてなしは最上なもので、仕事の手伝いや、手間取に頼まれて働きに

来た人でも、普通お魚の煮たのや焼いたのや野菜の煮つけなど、五つ位のお皿をお膳一杯に付けて、汁物もお吸物とおみおつけと二通りはまず使います。ですから法事とかお祝いとか大勢のお客様の場合はどうでしょうか。皆様方の御想像におまかせ致します。それなのにふだん家の人の食事には無関心で、お客様には立派なお膳に数々の御馳走を並べますが、家の主人でも粗末な飯台に粗末な御馳走で、お魚などはあまり食べません。そこで同じ席でお客様だけは立派なお膳の前に座らされ、「さあどうぞ。」とすすめられますが、私の場合何だか申訳なくて、せつかくの御馳走も落付いて頂けない気が致します。こんな風に主人でさえ、お魚なんかたまの御馳走ですから、嫁さんなどは当然粗食するということになります。

こうして嫁さんの生活というものはゆがめられているのですが、男女同権とか、民主々義とかと言われている今日、この地方の嫁さん即ち婦人の地位を少しでも改善向上させたなら、嫁さんの生活を明るくし健康が守られ、健康な子供が育てられ、やがては大きな国の力ともなるのではないでしょうか。

婦人の地位は高まつたか

——農村の家庭生活において——

平林千代
（千葉縣・保育助手・二一才）

戦後婦人の解放が叫ばれて来たが、私達の生活はほんとうに人間らしくなつたろうか。

農村の女達にも婦人会を通して色々の事が知らされる。しかしそれは、生活にぴつたりと来る生きた問題とはなつていない。婦人会の幹部というのは、大抵女の子は小学校しか行かなかつた頃学校を出たという中年の女達で、別にそういう仕事に熱意を持つている訳ではなくても、唯一般の農村の間では関のあるこうした人達が役につかさせられてしまうのである。多くの人々はこういう運動や中央の動きとはかゝわりなく、自分達だけの毎日に追われている。季節季節の仕事を思い、仕事に追われて蟻のように生き続けている。夜になつて食事がすむと、もうがつかりしてしまつて、新聞に目を通すのもおつくうだ。ラヂオの娯楽番組を聞くのがやつとである。けれど昼間、仕事はいつぱし男と同じようにする。だから、仕事の上では、口を

はさむ事が出来る。しかしだからと言つて計画的に、あの畠は来年何を作ろうとか、今度何を蒔きたいから空けておこうとか、こういう新種を使つてみたいとかという大きい動きを決める事は出来ない。しかし、家事しかやつていない奥さん達に比べると、ずつとはつきりしているのではなかろうか。夫や夫の兄弟、親と一緒に畠から上つて来ても、男達が庭の縁台や冬ならば釜場で一服つけている間、妻はせわしく食事の支度をする。急いで食べると洗濯もする。しかも大抵の農家では、若い妻にお金はまかせられていない。買物は町まで行かなければならないから、夫は自転車で行き家族のものを買つてくる。〝工夫もまた楽し〟と貧しい家計をやりくりするさゝやかな自由もない。あてがわれた着物、あてがわれた仕事、あてがわれた楽しみ、こうして一般のお嫁さん達は自分達の事が論ぜられている事も知らず、唯習慣のまゝに生きている。けれど彼女達にだつて色々の不満はある。それは、今すぐどうという程はつきりしたものではない。心の底に何時かたまつていてもえようも知らない。何かゞ起ると本能的に、瞬間的にもえて来る。しかし自分だけがはつきりとした〝私の生活〟を取つてしまつた後に、ぼう然としている。結局は無力な姑や子供達の事を思うとどうする事もできない。彼女達は自分の結婚をふりかえつてみる。私達は好きで一緒になつたわけじやない。年頃になれば嫁にや

る。誰とでもいい。どうせなら便利なように、親戚同志なら別にお金をかけて支度をしたり式に費用をかけたりしないですむ。近所同志なら農繁期に手を貸し合える。世帯道具のすつかり揃つている所へ養子にやれば、農機具もあつて重宝である。貧しく生きてきた両親の智慧で適当に決められ、自分もしつかりした考えもないし、結婚するという事に憧れていたから、自然と結婚してしまつた。男は唯女でさえあれば、よつぽどの不きりようでない限り誰でもいいのである。女達は熱心に仕事をする。しかし生活をもう少し何とかしようという気持はない。男も生活の方はそれだけ考えていない。今の農業の仕事は夫婦が力を合せてやらなければ出来ないのだから、ほんとうに力を合せていけばいいと思う。対等に話し合つて仕事をし、生活をし合える妻。それには女が自覚して、根気づよく努力していかなければいけない。そこまで行かなければ男の喜びもないだろう。

学校をおえた娘達はどうだろう。手のない家では家で百姓をやらなければいけない。これが男の子だと、長男でない限り外に出ることを許されるが……。手のある家では働きにいく。親は嫁入支度のたしまえにする為や貧しい家計の助けに働きに出すので、社会人として一人前に働くための第一歩を出させるのではない。狭い町では好きな仕事も中々みつからない。町まで

の通勤には時間がかかるから、体力が必要だし、夜学へも通えない。しかし彼女達は働いている。彼女達が結婚したら……。何かゞ、今と違つた何かゞ農村の生活に加わるかも知れない。でもだん〳〵だと思う。貧しい日本では、これがぎり〳〵という所をみんなが生きているのだから……。

女も男も努力しなければいけない。悪い條件ばかりの今の日本である。けれど努力しなければいけない。そうしてみんなが、お互いに理解する。すべてがだん〳〵と進歩して行き、女も当然人間としての地位に戻るだろう。そうなるといいんだが……とほんとうに思う。

婦人の地位は向上したか

西岡卓子

（鹿児島・農業・二二才）

先日部落の婦人達の集いの席上で、家庭生活に対するいろいろな意味での声が、私の注意をひいた。

そしてそのほとんどが不満の声であることが、妻・娘としての家庭生活における地位の低さ

をあらためて考えさせられるのであつた。

ある婦人が、近所の一引揚家庭の主人が夜ふとんをのべているのに感じて、自分が夕食の後始末や、乳呑子の世話をしている間に、ふとんを敷いてもらうように夫に頼んだところ、その夫は「ふとんも敷いてやれぬような妻なら出て行け。」とどなつたそうである。農村婦人は都会の婦人のやる仕事の外に、直接生産部門に従事して、実に労をおしまず働いている。その点、当てがわれた家計の中で苦労するだけで明けくれる都会の婦人にないたくましい生活力がある。しかし農村の家庭事情は、婦人が精神的にも、肉体的にも喜んで働けるような状態にあるであろうか。

生活條件を人間的にましなものにしようと云う心持ちは、今日の若い農村婦人の中に動いているが、そのような願いを自然なものとして、納得できずにいる男性のために、次第に幻滅を感じて行く婦人の多いこともまた事実である。

ある農村サラリーマンは焼酎を飲んでは深夜にならねば帰らない。その上家においても三日に一升位はあける。そこで妻は夫に健康上良くないこと、子供も多い上に経済的負担の重過ぎることをのべた。ところが、やにわに夫は妻をなぐりつけたと云うのである。聴いていた婦人

達は溜息をついた。しかし四十才代以上の婦人層は「貴女の夫はまあ良い方だ。女遊びをするのではなし、明方にしろ家に帰つて来るのだから。」と云うような意味のことを云つた。私は一人の女としてしみ〴〵と考えさせられた。ふとんを敷いてもらうだけのつゝましいわがまゝも理解されず、深夜に帰る男性の行動は女性自らが肯定しているのである。家庭を風波なく育て自身も摩擦なく人生を過すには、男性のある程度の横暴には目をつむつた方が安全だと云うあきらめが、どれほど女性の人間的な成長をさまたげ、地位を引きずりおろしていることだろうか。

農村生活が婦人に望んでいることはあまりに雑多であり、あまりにも悪條件のもとである。非能率的な台所に、農事に、育児に忙しく新聞やラジオによる知識を身につけることを忘れてしまつたら、刻々に進んで行く歴史の中で、農村婦人だけが取り残されることになるだろう。

農村婦人の地位の向上を阻止するものは私達の足もとにいくらでも転がつている。精神的向上を阻むものの一つに入浴の問題等がある。子供であつても女である以上男の先には入れない。少女の頃からそういうふうにして育つ人達が、何か女は男にくらべて身分の低いもの、いやしいものと云う自身の評価が生まれてくるのは当然なことではなかろうか。また「中学校を

卒えたら、どうせ女中奉公さ。学校の成績が良くても、女の子じゃ何にもなりやしない。」と娘の前で臆面も無く公言して娘を萎縮させる親。宿命的な観念は愛する娘にさへ教育の不均衡を余儀無くし、社会生活に又家庭生活に婦人が無力である大きな原因を作つている。私はこの悲しい農村婦人の現状を女性の幸福の限界と考えず、生々とした白紙のまゝの目で見つめ、なぜそのような不合理に置かれるのか、その根源をたしかめ、そしてより高い方向への努力をおしんではならないと思う。そうしなければあまりにもみじめな婦人の姿と卑屈な精神は、日本の農村に代々受けつがれて行くであろうと思うからである。

次に農村社会に於ける古い通念は一掃され、婦人の地位は向上しているであろうか？　私達の地方においては「否」と答えざるを得ない。部落の宴会等でも婦人はてんてこまいの忙しさその上宴会費の半分を占める酒代は男と同じように出しても酒に変わるものを女には出してくれない。そこである人が少しでもいいから女にも駄菓子なりと買つてくれるよう要求した。「今時の女は生意気だ」と男の側からの反対もあつたが、まずまあその次の時から酒とは比較にならないが飴玉が出るようになつた。しかしそれも長つゞきせず、二、三回で立消えとなつた。ある男の人が「あんなことをするとくせになる。」と云つたことがそのまま一決されたものら

しかつた。鹿児島の農村には「麦と女房の頭は、ふんだ上のことは無い。」と云う言葉があるが、社会に於いてもそのような扱いを受けている事実をいなめないのではなかろうか。道路又は公共事業奉仕にしても、男子が八日出なければならない時には婦人は九日六分が強要される。このように少なくとも高校以上の教育を受けた婦人達——農村では知識階級と目される婦人達——が時代の進化と共に高まつた意識と、婦人に対する古い評価のギャップに立つて悩んでいるのは明らかに婦人の地位の向上していることを示すものではないかと思う。このままで時代だけが新しく進むとすると、少くとも私達の地方に於ては知性的婦人の住めない村となりそうである。

第三部門　職場において

婦人の地位は高まつたか（入賞作品）

藤井光枝
（新潟県・織紡準備工・四〇才）

私は絹織物の産地で名高い新潟県のG町に住み、或る織物工場に準備工として働いている老女工でありまして、極めて限られた狭い視野ではありますが、職場に於ける甚だ低い婦人の地位について私の考えを述べて見ようと思います。その前に先ず、婦人の地位が高まつたということはどういうことかということを定義ずけて置く必要があると思います。

婦人が政治的に進出するとか、社会に於てまたは職場に於て、重要なポストを占めることも勿論婦人の地位が向上したと謂えるでありましようが、一般的に云つて、婦人の意志がどの程度尊重され、それが凡ゆる生活の面にどの位反映されているかということが、婦人の地位がど

れ位高まつたかを決定するのではないかと思います。婦人の職業の中でも繊維工業位婦人の特性に適し、婦人の労働価値を重要とする職場は少ないと思いますが、その職場に於ける婦人の地位は、十年一日の如く縁の下の力持ち的存在であり、糸扁景気の余光さえ射さない蔭役者であるのは何故でしようか。それは婦人自身の教養の低さと、時間的、経済的に余裕を与えない封建的な社会制度との、悪循環に依るものと思われます。約六十軒の織物工場に、千人余りの婦人労務者が働いているこの町に、一つの労働組合も結成されていないということが、この辺の事情を物語つていると思います。昨年の末労働基準局で作業員に対し或る世論調査がありました際、「貴女は労働組合とはどういうものか知つていますか。」「労働組合を結成すれば、今より良くなると思いますか。」等の問に對して、「労働組合は知つているが、組合を結成しても今より良くなるとは思わない。」と判で押したような答を出しているのです。日頃労働時間や公休日から賃銀に至るまで、すべて一方的に決定され、不平不満の絶えない若い彼女達が、一体どうしてこのような答を出したのか、理解に苦しみ理由を聞いて見ました処、若し組合を結成した方がいいと書いたことが主人側に知れた場合は、直ぐに賃銀に影響するばかりか、場合に依つては職場を追放される危険があるからとの答を聞いて、この工場には新参の私は寒々と

した思いが身に泌みたことでした。これは使用者側の封建的な圧力の強さと、働く婦人の力の弱さとの差が如何に開き過ぎているかを示すものであります。また昨年の春地方選挙の際に、町の機業家から出馬したボス的存在の某候補者の如きは、各織物工場を廻つてやつた演説の中で、自分が当選するかしないかは、直ちに貴女方従業員のあごが乾くか乾かないかに直接つながる重大問題であると説得して歩き、各工場主はこれに同調して、毎晩従業員を四、五名づつ当番制に駆り出し、メガフォンを持たせ声をからして叫ばせるなど、勿論無報酬で奉仕させられる有様を見ては、民主化の道遠しと感ぜざるを得ませんでした。これは要するに、婦人の地位を向上せしめるものは、婦人自身の素質の向上に俟つより他なく、それをもたらす根本的なものは、婦人の経済的独立にあると思います。経済的に余裕が出来れば従つて時間的にも余裕を生むことが可能となり、教養を身につけ素質の向上を計ることが出来るようになります。仕事の面に於ても単に機械の一部分の役割を果すだけでなく、進んで研究心を持ち、自分の職業が社会に果す役割についても充分自尊心を持つべきであると思います。或る日若い女工達が恋愛について語り合つている会話の中で「あんたなんか兄さんが鉄道に勤めているんだもの、兄さんの友達といくらでも交際が出来るでしょう。」と一人が云うと、「うん交際しようと思えば

いくらでも出来るけどね――相手から『貴女は何処に勤めてる？』と聞かれたらだ――ですからね！」という答だ。「私は機屋の女工よ。」と胸を張つて答えられるようにならなければいけないのだと思います。然し一面外部から張りめぐらされた強靱な封建の桎梏を、彼女達の自覺に依つて盛り上る力で打破る日を考えることは、事実百年河清を待つに等しいことなのです。また一方使用者側の反省にのみ頼ることも、打算主義の我利我利亡者には、蛙の面に何んとやらで、最近の復古調には頗る敏感なくせに、そろばん珠の都合が悪いことには耳をかしません。これはどうしても、社会的な大きな力で、封建の桎梏から解放してやることが必要なのではないかと思います。婦人会や、公民館などでもこの問題に対しては、兎角臭い物には蓋式であるかのように思われます。もつと勇敢に積極的に、これらの問題を取り上げて欲しいものであります。婦人が大部分を占める繊維工業に於ける婦人の地位が、男子を主とする金属工業より、はるかに差別待遇が大きいという不合理は、男子の理解と共に、この社会的な大きな力を如何に必要とするかを示すもので、先ず封建の殼を破ること、そして温い愛情と理解をもつていたわり育ててやる過程にあるのではないでしようか。

婦人の地位は高まつたか（選外佳作）

河野英子
（福岡県・事務員）

此の一篇を綴るに当つて、全産業の職場に進出し再建日本復興のために働いていられる婦人労働者の皆さんに親愛と感謝を捧げます。

一九四六年四月十日、日本婦人解放運動の歴史の一頁に破天荒の参政権が与えられて六年目、今日の欲こびも見ないで解放運動に殉じた幾多の先輩の為に、永遠の合掌を忘れてはなりません。婦人の地位向上のための法則が新しく誕生し、或は改正され、教育の均等化も認められて参りました。働く婦人の為に労働組合法、労働基準法等、男子と同等の権利と義務が与えられ、特に労基法では日本の職場施設の不備も考慮されて、外国法規にも見られない特殊條項の「生理休暇」が挿入される等、将来の母体保護のために大きな関心が寄せられております。

さて、此の六年の間に果して婦人の地位はどれだけ向上したでしょうか。自己への厳しい批判と後進者への警鐘のため検討して見たいと思います。

私の職場は、日本財閥の屈指に数えられる三菱系の鉱山です。昔は婦人も坑内に下つて働いておりましたが、現在では全部坑外勤務に切り替えられて居ります。

職種は選炭、事務員、病院看護婦、附添婦、栄養士、薬剤士、購買部、炊事婦、電話、交換手、タイピスト、給仕、フトン直し、坑木積み等に分れております。

一九四五年私が台湾から引揚げて、この炭礦に奉職した時に大きな矛盾にぶつかりました。それは肉体的にも精神的にも立派に成人した婦人の賃金が十八才未満の未成年男子と同じ基本給しか貰えなかつた事なのです。即ち十八才未満の未成年男子は保護礦夫としてひ弱な体格と確立性の無い職業意識の中で未熟練者としての労働賃金を受取つていたのでしょうが、この保護礦夫の中に成熟した職業経験の豊富な婦人にも、一括して未成年者の基準賃金を支払つているのです。ナンセンスと云うよりむしろ基本的人権の無視も甚だしいと、憤慨せざるを得ません。

こうした矛盾は昭和二十三年四月八日付の賃金協定を見て、私一人の力ではどうする事も出来ないと考えさせられました。此の協定書には『女子及び十八才未満男子の賃金額は、従来の実蹟を勘案、各炭礦の実情に応じて決定する」とありますが、「従来の実蹟」とは婦人の勤続

年数が短かく、自已の職業に対して専門的研究心が少いため、補助的ポストしか与えられなかつたその実蹟を指しているわけなのです。労働度に於ても技能度に於ても、坑外成人男子に較べて優つている有能な職業婦人が、この制度のために惨めな敗北感とジレンマにおちて、自主独立の精神を喪失しつゝあつたことは見逃すことが出来ません。ついに一九四九年炭礦労働組合福島県支部の中小鉱も網羅した婦人組合員が、同一職種に於ける同一労働同一賃金制の実質的確立を目指して決議文を添え婦人少年局に協力援助を申入れ、ついに労働省を動かし、鉱業連盟にも通達して吳々も違反なきようにとの警告が発せられまた。

そして昭和二十六年三月十五日、こゝにはつきりと「女子及び十八才未満男子の賃金額は、労働の質と量に応じ、一般成人坑外夫との均衡を得るよう各炭礦毎に協議決定する」と、改正されたのであります。然し私共も男子の組合幹部に対して、決して監視をおこたつてはなりません。なぜならばこの文句書きだけは一応納得のゆくように書き替えられましたが、実際の賃金配分の構成では職能給で又も見事に成人男子と保護礦夫に始めから区分されて、成人婦人は保護礦夫の枠で操作されてしまいました。ですから婦人の最高職能給を有する人でも、男子の最低職能給には追いつけないのです。良心的な成人男子からこんな美しい話を聞きました。

「婦人の方で年齢も勤続年数も僕達より多く、仕事もずつと先輩なのに、職能給で差別されちやつて、年の若い僕の方が男であるために多いと云うことは、彼女が黙つて仕事をしているだけに実に心苦しいことです」と……。学力も同等でありながら……。

先ず婦人の地位向上は経済自立の裏付けなくしてはむずかしいことです。

①自己のポストに対して専門的な職業教育を探究し、②働く者の権利と義務への絶対保持、③働き乍ら家庭生活も両立するような社会制度への運動、④社会の太陽として家庭の母としての教養の充実へ努力してゆくこと。こそ、即ち絶ゆまざる前進こそ、婦人の地位向上の階段でなくしてなんでありましよう。こうした点に於て職場に於ける婦人の地位は、全般的に高まつたとは云えないと思います。

今や、交流性の激げしい新時代の社会制度の焦点に立つている日本の近代的職業婦人の皆さん、私達はがつちりと全産業の婦人が縦横の連携を保つて、一日も早く外国の女性に劣らないパイオニア精神で、与えられた権利を無尽蔵に生かして、此度こそ私達の手で新しい分野を開拓して行こうではありませんか。

日本の職業婦人の前途に幸あれ。

婦人の地位は高まつたか

——職場において——

江野澤淑子
（東京都・高校教諭・三〇才）

憲法で男女同権を成文化されたことは私達女性にとつて幸せのことであつた。例えそれが男女に関する根深い舊習を打破しきれない処があつたにしても、多くの女性の胸に、古い型の良妻賢母にあらずして、男性と平等な一個の人間としての自覚を、一応はよびさましたのに違いないから。そもそも、家庭とは夫と妻と子供と、その他その家にすむメンバーの能力に応じた協力によつて経営されるべきものであるように、職場は男性と女性との眞の協力によつて運営されるべきものである。

さて、職場における婦人の地位は高まつたかということについて、私は自分の経験を通して一考して見たいと思う。

私が学校を出て、私立の女学校の教員となつたのは昭和十九年の秋であつた。その頃、世を

あげての動員時代故、私も御多聞にもれず、ある紡績会社に寄宿して生徒の監督にあたることになつた。しかも三日に一回、奉職校に宿直にゆかねばならないのである。そしてそこにおける女教師の役目は、集る教師達への炊事の仕度、掃除、果は早朝の菜園の手入、馬糞拾い等々。それも男教師達が雑談に花を咲かせている時に、女教師なるが故にせざるを得なかつた仕事であつた。年輩の女教師がほうと溜息をついて云う。「女教師つてこんなものよ。」と。

終戦の翌年、私は現在の奉職校である公立へ転任した。世間の大勢も変りつゝあつたし、又公立である故か、私立に見られるような、校長と教員との関係に主人と使用人的な傾向が全然ないことは嬉しいことであつた。もつとも私立校に見られる家庭的な雰囲気に欠けている寂しさは聊かあつたけれども、そして現在校の満六カ年の奉職を通じて、これだけのことはいえると思う。

(1)仕事そのものに於ては、男教師・女教師の区別がないこと。同量にして同質の仕事をなすべき責任をもつこと。

(2)女教師であるが故になすべしという強制は一切ないこと。但し、親睦會の時等、女教師達が「すきやき」等の仕度をいそ〳〵とすることがあるが、これは経費の軽減のために進んです

ることで、男教師が、式の場合に会場造り、暗幕張り等に労力を提供するのと同様なことである。

即ち、「女教師故に」という色眼鏡を外して、男女同等に扱われるようになつたことは、憲法制定後の大きな收穫であつたと思う。その点について、私の職場でも一応、婦人の地位は高まつたといい得るが、ここに女性の眞の自覚に俟たねばならぬ一つの問題があると思う。

それは、「業績」についてである。これは多くの職場の女性について云いうるが、「仕事の業績」「学問の業績」について無関心すぎるのであるまいか。私達女性は、自分の与えられた場を忠実に守ることは男性以上であると信ずるが、眼を枠より外へ光らすことは一般に男性には及ばない。併も女性は男性程、切実に生活とか、名誉とか、地位に対する何物かがないので、つい保身に汲々として現状維持に日を送る現状なのである。女性とても、あのクラーク博士のいう社会奉仕のための「大志」を持つべく努力しなくてはならないのではないか。さもないと折角、成文化された男女同権の本質が、空文化される恐れがある。かつての男女の不平等が、女性の経済力の稀弱からきていたように、今こそ私達女性が、殊に職場の女性が憲法の記載にふさわしいだけの裏打をしておかないと、將来私達及び次代の女性達が、実力故を以て、脅か

される時がないとはいゝ得ないのである。

以上、憲法成文化後、婦人の地位は一応向上したが、根の浅いものに思われる。私達女性は敢えて業績を立てるべく努力すべきである。その蓄積された業績の上に立つた男女同権こそ、眞の男女同権となるであろう。

職場における婦人の地位

駒尺喜美
（東京都・事務員・二六才）

職場に於ける婦人一般の地位は、本質的には何んの進歩もないのが現実ではないでしようか。

戦後、婦人課長や婦人博士の数が、いくらか増したことは事実でしよう。しかしそれは依然として「例外」でしかありません。

表面的には職場でも、レディーファーストのアメリカ的エチケットが浸透したせいか、女性に対する言葉使いは丁寧になりました。しかし、このことを以つて直ちに女性の地位を認めた

ものと解釋するならば、余りにもお人好し過ぎるというものです。

例えば「すみませんがタバコを買つて来て頂けませんか。」と丁寧に頼んだとしても私用であることに変りはありません。しかし丁寧な言葉使いは、封建性を覆いかくし、新らしい物のように見せる演出効果を持つているので、男女共、もしもこの錯覚に落ち入つてしまうならば、男女同権は一歩も進まなくなつてしまうでしよう。

男性が女性に対して、言葉使いの上だけでもエチケットをわきまえるようになつたことは喜ばしいことでありますが、女性の地位の眞の向上はもつと本質的な問題で、女性が人間として認められるかどうかにかゝつています。この考えに立つて、女性が職場でおかれている「場」について考えてゆきたいと思います。

職業紹介所を訪れた時のことでした。「いくらお望みですか。」という係員の問に対して、私は、最も謙虚な気持で「最低五千円は……」と答えました。すると係員は私の顔をまじ〳〵と眺めた後「あなた、五千円は最高ですよ。」と宣告しました。

年令・学歴・経験を考え合せて、私にはどうしても相手をびつくりさせる答えだとは思われません。学歴で給料を決定することや、世間一般に給料の低いことに関しては、又別の問題が

あるとしても、女であるという理由だけで、その仕事ぶりも能力も見ない以前に、このように安く決定されているということは余りにも不合理なことです。

どうやら専門学校も出、満二十六才にもなつたのだから、独立することが男なら当然としてみとめられているように、私も勿論独立したいと思うのですが、残念乍ら五千円では食べるだけの生活すら保ち難いのです。

舞台での家出をするノラに対しては拍手を送る世間も、ヒバリさん的存在からぬけ出そうとする現実のノラ達に対しては、親や、夫の被護を受けねば生きられないような低い給料を押しつけているのです。

次に女事務員の特長として給仕を兼ねるということがあります。

私は決して茶汲みをいやしい仕事と思つているのではありません。唯、給仕と兼業ということは、第一に、始めから女には責任のある一つの仕事を与えるつもりがないこと、第二に、義務として茶汲みをさせられていれば、専門的な職業人として伸びる可能性が少くなるということが問題なのです。

給仕は給仕として一つの仕事ですが、唯それが女だから強いられるとすれば、女は何時の場

合にも、こま〳〵と雑用のみをする立場におかれることとなり、益々大きな観点から仕事を把握し進めてゆく能力の養成をはゞまれる結果となるのです。

大抵の会社では、女事務員に向つて「あなたは事務と給仕と兼用です。」と職種を明らかにしないようですが、それは暗黙のうちに女には給仕はつきものと思つているからでしよう。

しかも、女への期待は、むしろ給仕の方に大きくかかつていることが多いのです。いや、それどころか、私用の方に期待がかかつてることすらあります。或日、仕事中の女事務員に向つて、「ね、僕がそれをしてやるから、めしを炊いてくれないか。」と云つてるのを聞きました。又或時には、組合の中ですら「僕のポケットからマスクを出して洗つといて。」といつてるの聞いたことがあります。全く、まともな神経を持つていれば、毎日々々腹を立てるだけで疲れてしまいそうです。

次にもう一つ事務員の特徴として、AさんもBさんも、「女の子」という代名詞でことたりる存在だということを挙げねばなりません。男の場合は今日入つた社員にも「男の子」とはいいません。このことはささいな習慣上のことのようですが、実はそうではなく、女には、誰がしても出来る責任のない仕事しか与えられていないことの現れの一つなのです。

女は小さい時から、職業人として独立すべく教育されていないため、現状では男に比べて能力の低いことも、又感情的なことも事実で、第一、職業に対する心構えが違うことも事実です。しかしこれらの事実を充分に認めた上で、尙、私は女に対する評価は過少評価されているのではないかと思います。

人々は余りにも「女」というものの既成概念にとらわれ過ぎていないでしょうか。

「女はこんなものだ」という一定の色メガネを通して、常に女は見られているのです。

よく観察してみると、男も結構、ヒステリーを起すし、こせ〳〵して感情的だし、人の悪口もいうし、意地悪もやつてのけています。これら悪徳（？）が女の専売特許だというのは「伝説」に過ぎないことを発見しました。唯、男は社会生活の訓練に一日の長があるだけなのです。

男の場合は「奴、今日はどうかしてるぞ。」で済む所が、女の場合は「やつぱり女だ」ということになり、仕事に失敗した時でも、それが男の社員ならば、先輩が批判したり、指導したりして、べんたつしてやるが、女の場合ならば、「女はやつぱりダメだ。」ということになつてしまうのです。しかしその反面、女なる故に甘やかされることもありますが、それは決して人

間的成長には役立たず、かえつてマイナスの役目を果しています。

若し、すべての職場の人達が、女も又職業人として成長するようにと気を配つてくれるなら、否、少くとも男と同じ條件を与えられるなら、現在の「ヒバリさん」的教育をうけた女でさえも、もつと〳〵成長するに違いないでしよう。

以上、私は自分の経験が普遍性をもつているとの悲しい確信のもとに、いかに婦人の地位が高まらなかつたかを、二三の事柄から説明して来ました。ここに述べたことは社会施設や保障制度を云々する迄もなく、一寸した男の（多くの場合は男でしよう）決断力一つで出来ることばかりです。それすらが現状では行われていないという事実、この事実に立脚して、もう既に取上げ済みになつたような問題を、今又改めて世に訴えたいと思います。

婦人自らが、実力を養わねばならないとの認識に徹すると共に、まず女性の地位を訴え、強く要求しなければ、停滞どころか、後退を余儀なくされるのではないかと私には危ぶまれてなりません。

女事務員の声

川原　泉
（長野県・農業・五一才）

「お母さん、今度生れ代つてくる時には男に生れて来たいと思うの？　女に生れて来たいと思うの？」

さる会社の事務員をしている幸子が突然こんな事を私に尋ねた。私はちよつと面喰つたが即座に、「お母さんはやつぱり女に生れて来たいと思いますよ。」と答えた。幸子は「そうお」と腑に落ちないような顔をしていたが、「お母さん、どうしてなの？」と問い返した。

「私は五人の良い子に恵まれて、とても幸福なお母さんなのよ。女に生れて来たからこそ、こんな幸福になれたんですもの。」私は心から信じてこう云つた。「お母さんになればそうかしらね。……実はね、今日会社で女の人ばかり十人位集つてそんな話をしたのよ。そうしたらね、みんな『断然男に生れて来たい。』つていうのよ。『今のようなこんな世の中へ二度と再び生れて来たくはないけれど、どうしても生れて来なくちやならないのなら断然男だわ』つていうの

よ。『女の子〳〵つて男の人達に馬鹿にされてくやしいわ。』つて皆で憤慨したのよ。」

幸子はその時もこんな声をしただろうと思うような、黄ろい声で興奮した口調で話した。

いろ〳〵と話を聞いて見ると、その日掃除婦が欠勤したので、女の人達がお掃除をしていたため、朝のお茶をいれる時刻が少しおくれたのだそうである。すると、男の人達は自分でお湯をさそうともせず、茶碗をチン〳〵叩きながら、「サービス零だ。」ことの「のろまだ。」ことのと勝手なことを云つているので、女の人達が憤慨したわけである。「私達サービスガールになつてこの会社へ来たのじやないわ。」「何かいやな用事があれば、『女の子にさせりやあいい。』式なんですもの。」等と喧ましい声がつゞいた後、「結局私達なんてボーイ的な存在でしかないのよ。私達の人格なんて認められはしないんだわ。」「そうよ、男性なんて、女を見下げることによつて優越観を抱くのよ。それが証拠には、何か私達が云うと軽蔑されたように思うらしいわね。とても御気嫌がわるくなるのよ。」そして結局は次の世には男性に生れて来度いということになつたらしい。私はふつと三十余年も前のことが胸に浮かんだ。私が未だ若かつた頃、やはり職場に働いたことがあつた。その当時は、女性で勤務する人は至つて少く、時代が時代だけに、その存在さえもみとめられない程の影のうすいものだつた。勿論余り責任の持てる仕

事は科せられずに、お茶汲み役は当然のように仰せつかつていた。

たまに用事があつて早歸りすれば、翌日は黑板に〝にげられて春風寒し白湯の味〟なんて〝へなぶり〟を書かれたものだつた。

〝女故にこんなに馬鹿にされるのか〟と、くやし涙にくれたこともいく度か。

あれから三十余年、最近のめまぐるしい時の動きに、女性は解放され、男子と同等の権利を得、私達の時代には罪悪視された男女間の交友も、何はばかることなく公然と許され、婦人参政権も与えられ、実に驚異的な躍進振りである。

にもかゝわらず、昔歎いた私達と同じような歎きを今の女性も又くり返すとは……。一体、どうしたというのだろう。婦人の地位向上も結局掛声ばかりなのであろうか。あの子もこの子もみんな洋行帰りかと錯覚を起すような、パリッとした洋装をしながら、相変らず三十年も前の庇し髪姿の私達と、職場に於ける地位が少しも変らないとは、実になさけない限りである。それならば何故に向上の進路は阻まれるのだろう。ここにも又女事務員達の訴えるように男性の無理解が取りあげられる。

婦人が日々に自覚し、えらくなつて行くのを、心から喜んでくれる男性がいく人あるであろ

う。婦人がその頭角を現わすことは、自分がふみにじられたかのように、自分の権力を侵害されたかのように、ヒステリカルに考える男性の今なお余りにも多いのに驚く。かゝる男性が婦人の前に大手を拡げている限り、地位の向上は容易なことではない。又彼女自身も、自ら墓穴を掘るような愚をくり返していることに気付かなくてはならない。男性に信頼されるようなお仕事をしているかどうかを内省してみてほしいものだ。所謂〝お嬢様のお小使いかせぎ〟式な働きでは、とても責任の持てる仕事は与えられはしない。その全部とはいわないが、一カ月の報酬では購うことも出来ないような、はなやかな流行を追つた服装をして、物見遊山のようなおしやれをしているあの服装が、もつと〳〵緊縮されない限り〝嫁入り前の腰掛だ〟とか〝遊び仕事だ〟とかの批難をあびるのは当然のことである。中には女の若い細腕に、一家を支えて行く人もあるだろうが、大映しにうつし出される婦人の姿は、哀しい哉、自らを葬るようなあさましい姿でしかない。婦人の進むべき途は開かれている。歩武堂々と前進しようではないか。〝女ゆえに今日の幸あり〟若き女性をしてかく唄わしめるのも、婦人自らの努力の賜に外ならない。

婦人の地位は向上したか

大森とし
（東京都・公務員）

まだ手すりには昨日からの埃がうすくつもり、階段は森閑としていてうす暗い。五階まで昇るのに、重いオーバーを着ているとかなり苦しい。息をせい〳〵切らしながら部屋へ入ると、すでに二人来ていて、掃除は始められている。窓を開け放ち、見下すと、凍てついた街路は人通りもまばらで、皆寒さに首をすくめ急ぎ足である。部屋を掃き、机を拭き、ドアも、つい立も、戸棚も上から下までふき込む。次は課長室でこゝは一層丁寧に空ふきをかけて磨きこむ。約四、五十分ですむと、今度は火起しである。割当てられた六箇の火鉢に炭をつぎ、火種をつくり、眞赤におこるまでうちわであおぐ。埃と炭の粉がもう〳〵と舞上るが、うす暗い廊下なのでよく見えないのが幸いである。その時分には男子職員でも早い人は出勤して、綺麗になつた部屋で煙草を一服、新聞を読み、元気のやり場に困るらしい若い人はピンポンに打興じている。今度はお茶を出すのだ。お昼になると、お茶の御用きゝである。お米を出してたいてくれ

という人もいる。そしてそこら辺に食べ散らしは放り出してある。その後片づけは女子がするのだときめてかゝつているらしい。そして自分達は読書に余念がない。仕事が忙しいわけでは決してない。こういう男子は女子を一体何と心得ているのだろうか。家庭に於て夫と妻として生活の各方面を分担して受けもち、夫は外で働き、妻は家庭の仕事に従事する。そして対等の一対一の生活をする。これは当り前で自然のことである。しかし、勤め先に於てはすべて職員として平等であるべきだ。女子は能力が低いので男子の私用をするというのは当らない。能力が低ければひくいなりに公けの仕事はいくらでもあるのだし、又能力に応じて給料も安いのである。男子の私用をさせられて、かげで文句をいいながらも表向き快く引受けているように見えるのは、つまり女の目的はよい結婚をするというたゞ一つの事にかけられているからである。いかにも家事が好きで、よいお嫁さんの資格がございますということを広告したいのである。お化粧に浮身をやつし、読む本といえば、婦人雑誌、スタイルブック、少しこみいつた仕事はもう分らず、法律も法規も目を通そうともせず、その日〳〵を面白く暮して、お勤めは結婚までの小遣取としか考えず、早く結婚して男子に隷属して安楽に養つてもらおうというのである。敗戰のお蔭で与えられた男子と同じ権利にしても、眞にこれを理解し、それに恥じない

ように向上しようとする女子が果してどれ程いるだろうか。一例をみると、いつも法律を身近かにおいている官庁の女子の内でも、憲法を読んだことのある者が何人いるだろうか。女子の大部分は一切そういうことには無関心で、かりに関心があつて勉強しようとすると、すぐ男子からひやかされたり、生意気と思われたりしそうなので、おじ気がついてしまうのである。結局苦しみもせず、闘いもせず、与えられた権利は、拾つたお金のように身につかず、少しも女子のものになつていないと思う。何の自覚もなく、普通りのみじめではあるが安易な生活態度を改めようとする意志、一歩でも前進しようという考えは全くないのである。こういう状態では到底女性の地位の向上は望み得ないから、次の時代に期待したいのだが、小さな女の児をもつ若い母親はいう。「いゝわ、この子、勉強出来なくても、売れ残りにならないうちに早くお嫁にやつてしまうから。」これでは次の時代にかけた望みもだめらしいのである。いくら上から与えられた権利があつて名目上男女平等になつても、眞に女性自身が目ざめる迄は、女性の地位の向上はまだ〳〵道遠いことゝ思う。

婦人の地位は高まつたか

氏名不詳

今度「婦人週間」に寄せて論文募集がありますが、私は無学ですので、そうした難かしいことは出来ませんが、日頃思つて居りますことをつたない文に託します。社会の人々の関心が私達に向けられて、多少とも私達同じ職業の者を御理解下さいましたら、これ以上の喜びはありません。

其の職業と申しますのは女中奉公です。この言葉からして遠い昔の封建時代と変らず、又仕事も少しの変化もありません。私達この仕事に従事している者は、社会から忘れられた存在ではないでしようか。世の中は軍国主義から民主時代と移り変り、又その波に乗つて男女同権がさけばれて、会社に、工場に働く婦人達もずい分待遇がよくなつて来ました。種々の労働運動が起つて、賃金値上げ、日曜祭日の休暇を要求する等人権が尊重されて来ました。でも私達にはそれらのことは淡い夢の国の出来事のようにしか思われません。日曜はおろか休日とてもき

まらず、一日八時間労働は実行できないことです。私達には組合もなく、私達を護つてくれる社会的な條件もありません。それ故、賃金のことも与えられるだけで自分の方からとやかく云うことは許されず、たゞこれらのことに対する私達の抗議は務めを止めると云う道一つです。

私達は番外なのでしようか。仕事が家事なので労働と云つても大した物じやないとおつしやるかも知れません。でも、朝六時から夜十時頃迄一日中働き、一緒に生活すると云うことは、工場で働くよりももつと〳〵気をつかい、精神的にくたびれます。夜床に入つてやすむのが最上の愉しみでもあるのです。

中学校を卒業の人々にもあまり喜ばれないこの職業は、仕事が嫌なのでしようか。又呼名に対するひがみでしようか。それと云うのも社会が女中とは無学な者、取柄のない者ときめている社会の見方ではないでしようか。

或日のNHKが三ツの歌で二人づつ出演した時のこと、「お二人はどんな関係ですか。」と係の人が尋ねました。その一人が、「私、女中です。」と云いました。それを私の傍で聞いていた人が、「『女中です。』とはつきりはずかしがらずによく云つたわ。私、あんな人大好き。」と、おつしやいました。もし事務員だつたらとしたら、この人は、このようなことを云つたでしよ

うか。いゝえ、女中だと云つたからに違いありません。それだけ働く方にも卑下した気持のあることはいなめない事実じやないでしようか。又大部分この仕事にたずさわつている者は、若い人達です。「きらいな仕事をせずとも、外のことをしたらよい。」と云われるでしよう。でも、この就職難には、私達無学な者はこの道を選ばなければならないのです。ですから、生意気なのかも知れません。又少しのことでも感情に支配されやすい欠点の表われかも知れません。

私は決してこうしたことを不満に思うのではありません。昔の人の女中奉公時代の話を聞くと、今の私達はずつと幸福ですから、たゞこうした待遇に甘んじて、炊事や子守に日々下積の職業とまじめに取組んでいる者のをることを理解していたゞきたいばかりです。

私達女中奉公する者にも歩調を合せて独立日本の平和を守る一員にお加え下さいませ。少しでも自分の教養をたかめ、皆様について行ける様努力致すつもりです。

職場における婦人の地位は高まつたか

小林富夫

（群馬県・地方公務員・二三才）

日本の婦人が、男性と共に政治に参加出来たこと、云い換えれば始めて、国会議員を選挙したのは、昭和二十一年四月十日の事でした。

以来、労働省婦人少年局が中心となり、各種団体が協力して、婦人の地位を高める為の運動は、撓まず続けられて来ました。今年は六年目の記念日を迎えたわけです。

此の六年間、婦人は曾て得られなかつた職業の分野に於ても全く、目覚ましい進出ぶりを示して来ました。今では婦人が従事していない職業は、ほとんど無い位でしょう。

昭和二十五年の国勢調査に表れた、働く婦人の数は、何と三六一万人に達しています。最近の中学校や高等学校を、卒業して就職する婦人の数を統計的に眺めても、年々増加しております。

これは、戦争中どんな職業にも婦人が就いた事により、婦人自身が職場に対する自信を得たことゝ、社会がその事実を認めた事に原因しているように考えられます。又、婦人が職に就く事を卑まれ、嫌われる封建思想、「芸が身を助けるほどの不倖」……と云う考え方を、完全に打破しようとしているからであるかもしれません。或は又、働かねば生活出来ないと云う、現実の経済的理由も大きく支配している事でしょう。

それ等のうちの何れが、正しい理由であるかは論外としても、その背後に、婦人自身が職業を通じて、より良き社会人たらんことを願う「自覚」が存在する事は、見逃せない事実のようです。この自覚は、婦人に正しい職業観を抱かせるようになつて来ました。

戦争直後は、全く存在していなかつたところの婦人警官や児童福祉司、司法保護司、労働基準監督官等は、新しい婦人の進出分野です。従来より婦人がすべてであつた助産婦・看護婦・保健婦等は勿論のこと、前者のような新分野に進出したと云う事は、婦人の地位を婦人自身が自分達の手で獲得しつゝあるのだと断言出来そうです。

労働基準法の第四條には、「使用者は、労働者が女子であることを理由として、賃金について、男子と差別的取扱いをしてはならない。」と、男女同一労働同一賃金の原則をうたつております。これは経済的にも婦人の地位を高めるように、法律によつて保障されているわけです。

つい先日の家庭朝日には、女なるが故に男性と差別扱いされたのを憤慨した、一橋大学卒業の女性が、就職難の折りにも拘らず、絶好の就職を蹴つて、婦人の地位を守り抜いた記事を報じておりました。又、或新聞の社説に、富士銀行ギャングの件で、十九才の女性が男子には気付かなかつた非常ベルを、押した事についてたたえていました。これ等は、個人で婦人の地位

を築きつつある、最近のたのもしい明るい話題です。こうなつて来ると、婦人は男性と職業的に見て、全く同一で何等差別の無いものになりそうです。

労働基準法の六十六條には、働く婦人が、その乳児を育てる為の授乳時間を、請求出来るようになつております。又、同法六十七條には生理休暇の存在も、うたつてあります。或は又、深夜作業や危険作業からの保護も規定されております。これは、婦人の特殊性を明示したものなのです。男子に互して職務に就くとは云うものの、この特殊性は単に法律で保障されているだけでなく、実際に活用されなければなりません。

しかしながら、職場の騒音の中で、周囲の者に気がねして授乳したり、又、婦人専用の便所が無かつたり、更衣室や洗面所も無いような職場が、まだ〳〵多いのではないのでしようか？婦人が働いている場所は、婦人にふさわしい職場施設を整え、健全に気持良く働けるような環境をもつ事こそ、眞に婦人の地位を高める事だろうと思います。

それには、婦人は男性に対する依存的な考え方を完全に清算し、男性は婦人の立場を理解して、各々がお互いに協力してゆくところに、職場に於ける婦人の地位も向上し、明るく楽しい能率的な職場が生れるように思われます。

婦人の地位は高まつたか

——職場において——

広瀬　正
（新潟県）

「彼女は女としては仲々やるね。」
「うん、あれで男ならすばらしいんだが。」
どこの職場でもちよく〳〵耳にする囁きである。それは男性の中に巣食つている、いわれのない偏見から生れる言葉なのだ。そしてこの偏見が、婦人を無意識の中に、漠然たる卑屈感の中に閉じこめてしまう。
「どうせあたしたち女ですもの。むきになつたつて仕方がないわよ。」
卑屈感はやがて、職場における安易な生き方に、彼女自身を持つてゆく。これが職場における婦人の向上を阻む一つの障壁である。
封建制度は明治維新とゝもに滅びても、封建性はずつと今日まで尾をひいている。八千万の

約半数を占める婦人を、蔑視するのと尊重するのと、どちらが国の発展の為であるかという、簡単な事さえ解らぬようでは、日本民主化も未だしというべきである。

「学校で教わつた男女同権なんて空念佛だつたわね。」

「そうよ。初任給から男の子と三百圓も違うんですもの。」

労働基準法第四條に「使用者は、労働者が女子であることを理由として、賃金について、男子と差別的取扱をしてはならない。」と規定してあるにもかゝわらず、会社工場側はどんな理由によるのか、同じ新制中学や高校卒業生採用に当つて、三百円か五百円の差をつける所が多いのである。これが婦人にとつて第二の障壁になつている。

これは使用者には経営の合理化になつて好都合であるが、被使用者としては、婦人の低賃金は、男子の賃金上昇を牽制する役割を果すので、極めて不利な点である。男子がそれに気附かず、いわれなき優越感に浸つているとしたら、随分おめでたい話である。

「彼女も結婚したら、さつぱり生彩が無くなつたね。」

「仕事の上でこれからという所だつたんだが、全く惜しいもんさ。」

こんな会話もよく聞かれる。働く婦人にとつて、家庭と職場の両立ということは、かなり至難な問題である。二人きりの共稼ぎの場合でも、相当障害があるのに、まして舅姑弟妹と一つ家に暮す生活では、思いの外の煩いも多い。

「彼女また休んだね。」

「何でも姑が大変な喧しやで、家庭にいざこざが絶えないんだそうだ。」

こうして多くの才能に恵まれた婦人が、心ならずも職場から身を引くか、甚だ低能率の勤務ぶりに堕してしまう。これが第三の障壁である。

これは婦人の環境から来る外部的條件であつて、絶対に彼女等自身の罪ではない。婦人の職場における生理的ハンデキャップは、産前産後休養、生理休暇等によつて、ある程度カバーされているが、職業婦人の家庭における立場を保護する何等の法律もない。民法は改正されても、事実上民主化の盲点は家庭であるから、彼女等の浮ぶ瀬はないのである。

「やはり女は女だけしかないね。かんじんな所で決断がつかないんだから。」

「あれじゃ責任のある仕事は委せられないよ。」

こんな声もボソ〳〵聞かれるようだ。この非難は、婦人に共通の依頼心の強さをついている。

「××さんが今度主任に抜擢されるそうよ。」

「まあ驚いた。あの人が。」

「そうよ。課長さんのお覚えめでたい彼女ですもの。」

婦人同志の廊下の隅での私語である。同性に対する嫉妬心がそこにはむき出しにされている。第四の障壁は婦人自らの特性の中にはらまれていると言えよう。

これは一見婦人自身の罪過の如くである。然し、彼女たちにしてみれば、「こんな女に誰がした。」と言いたい所であろう。女大学の昔に遡るまでもなく、明治以来常に中学校より低い女学校の教育を施され、高等の教育を受ける機会に惠まれる婦人は稀であつた。こうして良妻賢母の型にはめこまれた彼女らは、男子に隷属することによつて、その存在を保つしかなかつたのである。従つて、その依頼心や嫉妬心等々を、婦人の原罪の如く責めるのは余りにも残酷である。

今日少数の局長、課長、校長、社長等を出したからと言つて、女性全体の地位が高まつたな

どゝは考えられない。凡ての職場に於て働く婦人が十分その天分を伸し、男子と同等の待遇を受け、愉快にその日〳〵を過し得る日の到来を期待してやまない。その為に彼女ら自身の力を強力に結集することが望ましいと思う。

第四部門　社會生活において

婦人の地位は高まつたか（入賞作品）

西　峯　三　景
（東京都・新聞記者）

一九〇三年にパンクハースト夫人と二人の娘によつて開始された英国の婦人運動は、テロリストのようなはげしい歴史を伝えており、アメリカの婦人運動は独立戦争以前からスタートし、八回も投獄されたヴイクトリアのごとき闘士を生んでいる。獲得された自由や参政権や経済的諸権利は血がにじんでおり、その成果はそのまま女性の地位の高さと一致している。これに反して日本では、女の諸権利は、一挙に法律的に与えられたものである。したがつて女の地位が高まつたか否かは、いかなる権利をもつているかではなく、それがどのように行使されているかによつて観察されなければならない。

卒直にいえば日本の女性は、見習工が精密機械の前に立つたような当惑を感じている。それは彼が永年かかつて組立てたものではなく、完成品として贈られたものであるから、いかに構造を説明されても操作に馴れるには時を要するのである。そして、ヨーロッパとアメリカで半世紀かかつたものを我々が学びはじめてから、まだ六年しかたつていない。

権利と現実とのギャップは、婦人代議士の数が漸増せず漸減したという点にも見出すことができる。もちろん簡単な数字で割り切ることは誤りがあるにせよ、そこには女性の権利を政治的に拡張する確固たる地盤がまだ出来ていないことを示している。全国婦人有権者の半数近くを占める農村の女性の投票は、ほとんど夫の意見に左右され、その夫たちはボスや有力者たちの意見に左右されている。都会においてさえ、家庭婦人の大半がそうである。封建的な夫婦関係そのものが一つの女性問題を提供している場合にも、こまかな日常生活の点では争う妻が、選挙については夫の判断にしたがうのである。

従来は、結婚の幸と不幸は夫の手中にあつた。今日ではすくなくとも不幸な状態を永続させない権利が女に与えられている。女は親権によつて結婚させられず、夫の一方的意志によつて同棲を強制されない。離婚條件によつては経済的要求もできるし、子供の処置も妻の同意を要

する。だが、家庭裁判所を利用する女はきわめて一部分であり、男の姦通、一方的な遺棄、虐待に忍従している女はその数十倍に達している。経済的独立の経験も見込みももたない大半の女にとつては、法律上の権利はそうたやすい武器ではない。

だが、これだけの制約があるにしても、全般的に女の地位が高まりつつあることは、何人も否定できないであろう。ラヂオ、新聞、雑誌、映画、演劇、座談会、集会、学校、――マス・コンミュニケーションのあらゆる潮流が、無数の反作用や抵抗や逆批判を含みながらも基本的なひとつの方向をめざしている。それは、国民生活のあらゆる面で女性の意志を無視できなくなつたという、漠然とした、それだけ抱括的な認識である。今日、どの選挙立候補者もマイクで女性に訴えることを忘れないし、ジャーナリズムは女性欄の必要を痛感している。また大半の男は、たとえ本心からではないにしても、女性に理解のある人間だと見られたがつており、もつとも封建的な夫でさえ、妻に暴力をふるうのに一種の後ろめたさを感じ、口実をさがすのである。これらは、女にやさしく振舞うことを屈辱のように見なしたアブノーマルな抑圧心理から、青年が解放されたことと相俟つて、過去六年間に醸成されてきたきわめて大きな変化である。

しかし、いちばん重要な変化は、なんといつても女の職業の増大と、それが女の心理はおよぼした影響であろう。今日では学校を卒業してから結婚するまでの期間を、家庭で花嫁修業に費す娘はほとんどいない。また働いて收入を得ることを、特殊に感じたり恥じたりする家庭もなくなつた。わかい娘たちは地位や境遇の別なく、額に汗して得た收入でみずからの生活と自由を獲得することを誇りとし、熱望している。夏季のアルバイトですら、かなりの労働と安い報酬であるにかかわらず、ただまじめな仕事だというだけで、二十人の採用に数百人の女学生が殺倒した例を私は知つている。しかも職種の幅はひろがりつつあり、意欲に富んだ女たちはあらゆる職業の間隙を埋めようとしている。そして働く経験は臨時的から恒久的にと徐々に移行しており、夫婦共稼ぎの傾向——多くは最初の出産で打切られるにせよ——はあたらしい生活の一典型となしはじめている。

「見ること、知ること、理解すること。女は人間だ。」とゾフカ・クヴェーデルはさけんだ。体験を通してのみ女性は向上する。それが困難な、永い道程であることも事実である。だが、日本の女たちはそれに着手したのだ。そしてそれのみが、あたらしい皮ぶくろに新酒をかもすことだということを、やがて彼女たちは理解し、実証してみせるであろう。

社会生活に占める婦人の地位（選外佳作）

駒尺喜美
（東京都・事務員・二六才）

戦後、日本社会でも婦人の解放が、人類の歴史にとつては、不可避的に実現されるべき問題として取り上げられ、新憲法に於いて男女同権を明文化するに到つたことは、敗戦がもたらしたデモクラシーの中でも最大の成果と云うべきではなかろうか。

私は、このことに対して誰にも劣らない程の大きな評価を与えている。

今では男女を含めてすべての人々が、女も又人間として平等であるべきことを知つている。しかも、眞に婦人の地位が向上するためには、精神的独立と共に経済的独立がともなわねばならないことをも、多くの人達が認識するようになつた。そして現在では職業婦人という言葉が以前のように悪意をもつて語られることは殆んど見かけない。その上、重要なことは、職業を持つと持たぬとにかかわらず、殆んどの婦人が、解放されようとする者の、従つて成長する者の本能として、その心の中に向上心を燃やすようになつたことだ。

私は、これらの收穫は、婦人にとつて画期的な出来事だと思つている。それにもかかわらず、ここでのテーマ「婦人の地位は高まつたか。」と取つ組んだ時、躊躇なく、「否！」と大きく叫ばずにはおれなかつた。

私は、大きな憤りと悲しみとを持つて、「婦人の地位は決して高まつていない。」と断言する。

短い年月に対して私の期待が大き過ぎるのだろうか。それにしても社会生活のあちこちをながめる時、女は男のひとまわり下にしか存在しないことを示す事柄が余りにも多過ぎる。

私の印象で根本的に問題になると思うことは、女はいまだに公人としてよりも、私人として認められているに過ぎないということである。

或警視庁の人が、男の代議士に名刺を出して丁寧に自己紹介し乍らも、同席の女代議士には名刺も出さなかつた話を聞いたが、こんなことは、職場ではざらにころがつている事件に違いない。それにもかかわらず、女が鄭重に紹介されるのは、例えば「誰々さんの奥さんです。」という如く、皮肉にも大抵の場合は私生活の面に於てゞある。

更に眼を転じて、人間社会で一番大きな表現力をもつ日常会話に注意してみよう。女に対し

ての話題は、相手の意見を要求するような議論でないことを原則としているかのように、常に芯のない話題しか向けられていない。そして女のいる席で、政治や社会問題を論じた場合には、「かたい話をしてすみません。」などと礼儀の如く云う人すらある始末だ。

婦人は、いまだに公人としてよりも、私人として認められているに過ぎず、現在でも公の世界に位置を占めている婦人は、例外的存在であることが明らかである。

このことは根本的に婦人の地位を説明するものである。婦人が社会人として認められていないことは、人間として一人前の扱いを受けていないことを意味するに他ならない。社会人として仲間入り出来ないで、人権だけがみとめられよう筈がないのだ。

独立人でないものに対するいたわりの形でしか女性の人権が守られないとしたら、女性にとつてこれ程不幸なことはない。それは偽りの人権どころか、人権の反対物にさえなり得るのだから。

かく考えてくると、女性の地位は根本的には殆んど向上していないといえる。勿論、法律の後楯によつて、有形無形のうちに女性の地位が保たれていることは事実であろう。しかし、それはふみにじられるべき女性の何%かを、かろうじて救つているに過ぎず、女性の地位の最低

線を守つているに過ぎない。

では、こうした現状は、何ゆえだろうか。一つには女性が、いまだに人間としての実力を蓄え得ないこと、二つには社会が、封建的な偏見や習慣からぬけ切れないことが挙げられると思う。この両者は、お互いに交互作用を及ぼしているので、卵と鶏の如くどちらが原因かを求めることは困難である。しかし、私達が眞に人間となることを欲するならば、まず自分の側よりこのどう〳〵めぐりをたち切るより他はない。

経済的貧困や、家庭生活の非合理性が、婦人の向上をはゞむ最大の要素であることに間違いはないが、そのかげに自己の人間的自覚の不徹底さや、努力の足りなさを辯護するようなことがあつてはならないと思う。

まず、苦しくても禁断の木の実の味を知るならば、切り開くべき途も見出されるに違いない。

この婦人週間を機として現実をかえりみるに、中味は一向に進まないで、「婦人解放」「男女平等」などの言葉だけが、もうすでに食傷され、陳腐のかなたに押し流されようとしている。或評論家は「今や婦人問題は存在せず。」と云つているが、私は、まだ〳〵啓蒙の時期であるとさえ云いたい。

現在、「男女同権と云つても……」とか、「やつぱり女だから……」とかの言葉が流行ろうとしている。この時に当つて、何らかの形で男の特権を残そうとしている人達の、まことしやかな理窟と闘うだけの、論理的な確信を婦人自からが得なければならないことを、思いあらたにしなければならない。

婦人の地位は向上したか

——教員の妻——

豊崎春野
（茨城県・主婦・三〇才）

私は教員の妻です。夫は三十九才で、いま一万四千円の收入があります。その收入と僅かな内職の收入で、母と赤坊二人と夫婦五人が暮しています。

昨年のはじめ、まだ教員のベース・アップが実現しないとき、私たちは母と一人の赤坊と夫婦四人が一万円の夫の收入で暮していました。田畑はないし、赤坊は人工栄養ですので、ミルク代だけでも月二千円、家計の八〇パーセントを食費と育児費にあてながら、それでも月々二

千円の赤字がでてどうすることもできません。さいわい私は専門学校をでていましたので、就職を決心し、某校に内定しました。

私たちは希望をもつて新らしい生活を設計しはじめました。終戦以来すり切れた衣服が買えるかも知れない。夫のYシャツ、くつ、赤坊のきもの、私の服も買えるかも知れない。赤坊は母に頼みましよう。——六十五才の母にそれは無理かも知れないけれど。

私は就職の手続を運びました。保健所に行つて身体検査を受けました。妊娠！　そのとき、いま私のそばで泣いている赤坊を胎内にもつていることを知らされました。一人の赤坊でも容易でない生活！　私は働く決心をいよいよかためました。しかし私の希望ははかない夢であり、私の決心は弱い一本の葦のように他愛もなくふみにじられました。

就職はかないませんでした。理由はきかされません。「残念ながらダメです」——たゞそれだけでした。私は夫のことを考えました。私が文句を云つたら、夫も失敗してしまうかも知れない。私はあの古い封建的な匂いさえもつ「泣寝入り」と云う言葉をかみしめました。この「泣寝入り」が日本の民主化をはゞむものであることを私は知つています。妊娠のために職を失うということが、たゞ私一人の問題でなく、全日本の既婚婦人の問題に直接つながるものである

ことも私は知つています。しかし私は、私たちの貧しい生活、年老いた母のいのちと、生れ育つ幼いいのちを守るために、あえて沈默しました。八月の末に赤坊が生れました。私は長女とこの新らしい女兒に、女の忍従と「泣寝入り」——古い日本の醇風美俗を教えなければならないのでしようか。

千人針をさしながらしぼんでいつた銃後の花、学校を工場にかえて勤労の奉仕にいのちをへらした私たちに、終戦は、民主々義と婦人の地位の向上を約束してくれたように思いました。いま考えてみればすぐれた労働立法が実施されて、労働組合の中に、婦人の地位の向上がつよくとりあげられました。労働基準法に、婦人の保護が立法化されました。民法でも、妻の地位が向上しました。未組織の婦人の間に、台所の改善等を中心として新らしい生活改善運動が叫ばれました。

そして一方に、「近頃の女は」と云う声がきこえます。少年、婦人の人身売買が新聞の問題になり、赤い爪とビニールの腕輪に象徴されるような頽廃が、実りの少い恋愛を彩つているかも知れません。しかも近頃の女は生意気になつたのでしようか。いわゆる生意気な婦人のなかに、私は、婦人を一個の人間として支えてゆこうとするまじめな抵抗をみるのです。

婦人の地位はまだ人間にまで高まつていません。そしていままた下降しようとしているのです。

昨年夏、労働基準法に立法化された婦人の保護が実現しないうちに、婦人少年局の廃止が問題になりました。最近の新聞をみますと、労働基準審議会は女子の深夜作業をみとめて、立派すぎる基準法を改めようと答申しています。

夫の友人のある銀行員から聞いたのですが、そのひとの銀行では、今年はもう女子を採用しないそうです。「男だつて職業がなくて予備隊にゆくのですよ。」――そのひとはこういうのです。

「男だつて」――「職業がなくて」――「予備隊」。

私は胸のあつくなるのをおぼえました。短いけれども、なんと含蓄のある言葉でしょう。こうして私たちは職場から追われ、私たちの地位はおびやかされ、そのあとにはきつとあの古い調べが甦つてくることでしょう。

ベース・アップはしましたが、その上を越す高物価に悩む私は、苦しい家計を内職で支えながら考えます。――私たち婦人は、母は、姉妹は――組合の婦人もそうでない婦人も――私た

ちを理解する人々、日本をほんとうに愛する人々と手をにぎつて、婦人の地位の向上と働く人々の地位の向上につくさなければならない。婦人の地位向上は、日本の、世界の文化の向上であると。

婦人の地位は高くなつたか

高野とし子
（熊本県・主婦・三七才）

私は毎日ラジオの婦人の時間を自分の心の糧の一つとして、熱心にきいている三人の子女を持つ家庭の一主婦であります。此の度、「婦人の地位はたかまつたか」というラジオの論文募集に応じまして、普段私が拙い頭に考えているいろいろのことを、まとめて見たいと思います。

私共は敗戦という大きな犠牲を払いまして、戦前三十余年一部の先覚の女性達が、血のにじむような婦人運動を以てしても克ち得られなかつた参政権を、一夜にして与えられました。それと共に憲法、民法、労働法と、あらゆる法の面におきましても、一躍私共婦人の地位は高められ、守られ、確固たるものとなりました。婦人代議士の進出も目覚ましく、現在二十余名の

婦人代議士が堂々男子議員に交り、国会議事堂に於いて、私共のために働いています。地方自治の面においても、又職場に於いても、女性の進出は誠に目覚ましいものがあり、戦前の日本婦人の想像もなし得なかつた華々しさと、地位の向上を見ます。

私共のように毎日家庭にありまして、平々凡々家事に明け暮れて居ります者にも、ラジオや新聞雑誌などにより、目には見えなくとも、ひし〳〵と社会の空気が感じられ、何とも言えぬ女性としての喜びと自覚を全身に覚えます。何とかして今よりもう一歩、もう一足でも向上したい、勉強したい、賢くなりたいという衝動が身内を走ります。確に戦後の日本女性、殊に若い婦人の方々の明るく、潑剌と胸をはつて、しつかりと大地をふみしめて歩いている姿には、いじけた昔の日本の女の姿はどこにもなく、解放された、自由な、そして賢い自信をもつて、民主日本に生きている女性の姿を感じます。私もその一人でありますが、日本の女性は、最初は与えられた参政権ではありましたが、総選挙において、始めて感激を持つて投じました一票より、年と共に、選挙と共に、政治に対する関心も深くなり、私共の心の目は大きく広く見開かれ、すべての面において賢くなつたと言えましよう。与えられた大きな権利に対しまして、私共女性は立派にその義務を果すべく、日々努力向上していくように、祈りにも似た気持をも

つて暮しています。それは、考えようによりましては、未だに農村における女性の地位は低く、政治とか、社会とか、そんなものより嫁姑とのいさかいや、日々の暮しに手一杯で、何を考えるひまも、考えようというだけの自覚さえ持たずに、生きている女性も沢山います。しかしきびしい冬の後にしのびよる春のように、社会の流れは徐々にではありますが、こうした所にも流れよつて、近い日には、このように低い地位に甘んじてる人々にも、強い自覚と奮起と向上とが克ち得られますことを私は信じます。

まだ〳〵此の外にも、朝夕の新聞紙上やラジオによりまして、人身売買や赤線区域、又悲惨な戦争未亡人等の問題を目にし、耳にいたします時、民主日本、文化国家と口に唱えるわが国に、未だにこんな矛盾、不平等がと、悲しい気持にさせられます。戦後七年まだ〳〵世の中には、なされなければならぬ幾多の問題があり、私共の念願するほんとうの民主日本、文化国家の姿には程遠いことを感じます。しかし与えられた権利に対しまして、私共女性が立派にその義務を果すべく努力することにより、私共の社会全体は少しづつでもその眞の姿に立直つてゆくことを信じます。そして社会の健全な発展のためには、女性の地位の向上が与つて大きな貢献をすることを疑いません。わが国に於ける婦人の地位は確に高くなりました。そして世界の

他の国々の婦人の地位に比べても、形の上では決して遜色はありません。しかしほんとうの意味での高い地位が、絵に書いた餅などでなく、実質的な力を持つ揺らぐことのない堅固なものになるまでには、まだ〳〵幾多の起伏があり、努力を必要とすると思います。近頃きゝます復古調という声は、何かしら脊筋に水をかけられるような、いやな感じを与えます。折角与えられ、努力して高めてまいりました現在の婦人の地位が、独立日本の春と共に、又逆行することのないように、心より祈り、明日の日本を担い立つ可愛いゝ子供達の為にも、すべての日本の女性は手をとりあつて、力強く前進したいと思います。

婦人の地位は向上したか

藤岡マサ子

（北海道・主婦・三三才）

新憲法が確立されて私達女性も人間としての自由平等が約束されました。婦人解放の先覚者達が永い間求め運動して来た様々の要求が一応実現したのです。従つて婦人の地位も男子と同等になつている筈ですが、果して婦人の地位は向上したのでありましようか。私は「否」と答

えさるを得ません。むしろ実質的には低下したと思われる節さえあります。

私共家庭婦人の場合を考えて見ましても、以前と少しも変つてはいないのであります。私達は戦後の社会の不安定のもたらしたインフレその他様々の不安におびやかされながら、かろうじて毎日の生活を守り、勢一ぱいの努力によつて得たところの平凡な一日の暦をめくつて行つているにすぎません。世の識者は〝婦人の向上のためには家事を合理化して教養を高めよ〟と申します。けれども家事を合理化して内職の時間を少しでも得たいとねがうのが、一般婦人の現状でありましよう。かくして婦人はその煩雑な環境の中で、ものを考える力を失つて仕舞います。それから戦後私達へ課せられたものに老後の問題がありましよう。私達が精一ぱいの努力で育てゝいる子供等に、やがて老いるであろう所の自分を、果して托することが出来るでしようか。又扶養の負担を軽々と負える生活力を、この子等は得ることが出来るでしようか。世の母達は多かれ少かれこうした不安を持つて暮さねばならなくなりました。夫や子供へ依存する時代はもう過ぎたのですから、私達は新しい生き方を身につけねばならぬし、社会組織を作り出さねばならぬのですが、私達は何をどうすればよいのかわからぬまゝに毎日を送つているのです。

では職場の婦人はどうでしょうか。職場に於ける男女のあらゆる不平等はすべて是正されたはずなのですが、実際に於ては決して平等とは申されません。すべてその仕事に於ける重要部門は、男子職員が担当し、多くの婦人は極く末端の部分にたずさわつているのみです。中には職場の色彩的な存在にすらすぎない場合さえあるようです。又現在の社会状勢は婦人の職場進出をはゞむ傾向にあります。又女性は封建的なわくの中へぎやくもどりするような感じさえ与えられます。婦人一般の教養手引とも云える婦人雑誌をながめますのに、ずい分数多く出版されているそれらが云いあわしたように洋裁、編物、活花等女芸のくり返しで、婦人雑誌始まつて以来全く同じで、十年一日の如しと云えましよう。また働く婦人のためにもうけられた頁には、「上役へのつかえ方やエチケット、身だしなみ」など、事こまかにのべられている外、働く婦人の自覚をうながすような所など探そうにもありません。

このようなところにも職業婦人に対する社会の認識が窺えるようです。働く婦人とてもその地位は決して向上したとは云えないのであります。

では婦人の地位の向上をはゞむものは何でしようか。又実際に向上するにはどうしたらよいのでしよう。

かつて、婦人運動の先駆者が〝婦人の解放は経済的独立から〟と云うスローガンをかゝげました。全くその通りで、経済権を持たぬことは婦人を弱者の地位に甘んじさせました。一般婦人のたずさわる家事労働は無価値なものとして扱われて居り、又女性の忍従と犠牲とによつて支えられて来たところの家族制度の遺風は、まだ〳〵根強く残つています。

ではこうした社会機構から来る原因のみが、女性の地位の向上をさまたげているのでしようか。それなら新しい法律の擁護を受けて働く職業婦人はなぜ現在の状態を続けているのでしよう。又余裕ある家庭婦人も多いはずですが、何故これらの人々はもつと向上しないのでしよう。原因は私共婦人の内部に巣食つているものにもあるようです。言いかえれば永い間の封建的な社会制度によつて育てられて来た人生観が、私達婦人の内部に深く根をおろしているからです。即ち依存性、劣等感、権力崇拝など、結局これらの心理から早くぬけださなければ女性の向上はあり得ないのです。

今までは美徳とされていた女性らしさのからの中にとじこもつて安易をむさぼろうとする限り女性の眞の幸福は望めないでしよう。

私達がその地位の向上を願うのは男性に対抗する意味ではなく、男性を含めた人間社会の幸

福を眼ざすためであることは云うまでもないのですが、少くとも女性が力を得ることによつて、そのおおらかさと包容性を取もどしたなら、私達の社会や家庭はもつと明るくなることでしよう。

又古い社会観から解放された私達は、私達の住むにふさわしい新しい社会機構を作り出さねばなりませんが、それには婦人が手をとりあつて組織力をより強くして行かなければなりません。そして政治を私達女性のものにしなければならないと思います。私達女性は政治が私達の幸福と平和の建設のためにあることを忘れてはならないと思います。

おなごの劫（こう）

古賀禹子（ノブ）

（福岡県・二四才）

おなごは
生れた時から劫かるうて来たんじやけ
そう思うてあきらめにやあ

そのかたわらで
幼い私は　無心な黒い瞳（ひとみ）を
祖母の歎きにみひらいていたのでした

それから十年
いやな〳〵戦争の間
男も女もいちように
考えたり疑つたりすることを許されなかつた
時代——
私たちは教室で学ぶ代りに
工場で大砲の弾を磨き
畑で鎌の穂先きを光らせました
ふだんならば
女子供と片附けられて
社会の隅つこに押しやられる女たちが
白鉢巻もかい〳〵しく
職場の戦士とまつり上げられたのです

敗戦！
自由の風は東から吹き込んで
男女平等
婦人参政権
民法があらためられます　女代議士の新しい
話題、大学の門もひらかれました、男女は
同一賃金なんですよ
長かつた冬のあとの　待ちに待つた春の訪れ
——
あゝ　よかつた
これで私たちも息がつける
お祖母さんも　もう少し長生きしてれば
よかつたのに……

そう思つて
私はゆつくり笑つていました

二年、三年、五年
二人の娘の母になつた友だちに出会つて
どう？　と聞いてみました
彼女は荒れた手をかくして
おなごですもの
劫を背負つて生れたんだから
仕方がないわね
女の子は　ほしくなかつたのに……
口許の　小さなえくぼ
これは一体どうしたわけ？

昔々のおとぎ噺の中に
とつくに眠り込んでいると思つてた
こんなことばが
ルージュの紅い口から飛び出すなんて——

はつとして見まわす私の目に
売られてゆく娘たちの
不安げなまなざしがうつつて来ます
古いしきたりや考え方にしばられて
泣いている人
あきらめてしまつた乾いた表情
女なんぞとそつぽをむく憎らしい横顔
それらの後に重たく暗くのしかゝる
三界に住む家も持たない

おなごのさだめ　おなごのあきらめ

私はあせります
何かを見付けようとします
その視野の中に
生き〳〵と浮び出してくるいくつかの顔は
――
働いている顔
はつきり自分を知つている瞳
自信を持つて動いている手足

そうです　そうです
これこそ　私の探していたもの
さあみんな　元気を出して

しつかりと手を握り合わせましよう
おくれた人たち、泣いている人たちも
みんな一緒に包み込んで――
あきらめるのは、あんまり早すぎます
一足々々
しつかり歩いて行きましようよ
おなごの劫なんて
博物館の飾り棚に　かざつておけば
いゝんです
あとは一つ残らず
地球の外に投げ出して
女に生れたよろこびを
声を揃えて　高々と唄えるように
さあ　出かけましよう

手を引き合つて——

婦人の地位は高まつたか

藤村須美子
（東京都・二三才）

長い間の婦人に対する、世間の封建的な考えがそう急に変るものでもないが、戦後大部分の女性が職場に進出するようになつて、一般の女性観も大部変つて来てはいる。

しかし現在迄に婦人が職場で、成し遂げた仕事は殆んど目だたない、全く変りばえのしないものだつた。そこには職業に対する眞の理解も持たずに、どうせ学校を出てから結婚迄の短期間のお勤めなのだからと、少しの障害に会うと直ちに嫌気がさしたり、至極あいまいな悪く云えば遊び半分の考えでいた者が、多かつたからではないだろうか。

これは婦人の受けた従来の教育の欠陥にもよるだろうが、婦人が自らの手で自身を低めている以外の何者でもない。たとえ二年でも三年でも職業につく以上は、もつと職業意識に目覚めて、眞の理解と責任感を持つべきだと思う。

婦人が何の主義主張も持たずに、たゞ人に頼つていればよかつた時代は、もうとうに過ぎ去つている筈である。人間である以上は独立した個人の責任を持つように努力すべきである。何か教養を身につけるとしても、単なるお稽古事でなく、自分の得意とする道を専門的にまで極めて、それに依つて自身を磨くことを忘れてはいわしないだろうか。

婦人が結婚して家庭に入ると同時に、自分を高めることをおろそかにしている人が、多いのが現状ではないだろうか。妻が確な個性を持ち、人間的な魅力を持つているとしたら、夫にとつても大きな幸福に違いない。家庭に於ての妻が世間知らずの素直さを持つているよりは、友人としていゝ人生の相談相手である方が、妻の地位を高めてどれ程面白味のあるものになることか。

しかしそう云うことが分つていながら、今の家事が過重であるから、個性を伸す為の暇や経済的余裕を生み出すことは、やはり至難なことには違いない。毎日の小さな努力が男子と対等な人間として輝かしい生涯を送る礎となることを忘れまい。

しかし今迄長い間婦人だからと甘やかされ、個性のないように育てられて来たのだから、とても多少の努力で一朝一夕に、婦人の地位を高めることは出来ないだろう。そこに婦人の悩み

や、必死のあがきがあるのだ。我々はとにかく希望と様々の風波にも決してひるまぬ、たくましい心を持つことが必要になつている。心ない同性や男性の、女性に対する無理解から来る過つた考えを捨てて欲しいものである。何しろ世間は男女が共同で守つて行かなければならないのだから。婦人が世間から一歩遅れ始めたら、その時既に世間の眞の幸福から、見離されて終うことを婦人は学んでいる。誰だつて話相手にして面白くないものは、遂には相手にされなくなるからである。

現在女子が専門教育を受けるべく、大学へ進学するものは、男子と比べてずつと少い。何年かの後に大学進学者が男女同数になつた時、始めて婦人の地位が高められるだろう。それは現在の民主主義教育を受けた若人が、自分の子を教育する時に、始めて達成出来ることかも知れない。

現在が婦人にとつてどうにもならないものであつたとしても、自ら努力を止めては決してならないのである。前に多くの目覚めた婦人の先輩達が頑迷な世の中にあつてひるまず、自らの希望に灯を燃やして絶やすことのなかつた、その血を受けついでいる筈だからだ。

婦人が少しでも地位を現在より高めようと思うなら、一個人としての自覚に目覚めて、職業

に生涯を賭けて、希望と眞の熱意を持つて、努力して行かなくてはならない。

先進国の婦人達が白髪でなお、自分の職業を天職として働いている姿を見るのは尊いものである。一生涯を世の中に甘えずに、得意とする仕事で出来るだけのことをして、世間に盡すことも生きがいのあることである。

女性が他人の干渉をあまりせずに、先ず教養を深め自身を豊かにして、始めて他人を援助することも出来るだろう。それは自分が人に尽して上げたのだから、人も尽して呉れるのが当然と云うような、危険な考えに陥入らずに済むからである。

今迄婦人が甘やかされていた為に自身への努力を怠り、老年になつても下積の孤独な無味乾燥に近いような毎日を送らなければならなかつたのである。

他人の荷物にならないように、自分自身をはつきり摑むことが、婦人の地位を高める上に最も必要だと云うことを、今日の婦人週間に当り、改めてもう一度、考え直して見る必要があるのではないだろうか。

婦人の地位は高まつたか

飽田二三
（北海道・主婦・四四才）

娘とその伯母の話を聞いて見る。

「女の子は高等学校迄行かせて貰えば充分ですよ。それからお勤めにでも出て、お稽古事に身を入れて、お嫁入りの仕度でもする方がなんぼうよいことか。大学などに行つてごらんなさい。学問が身につき過ぎると、男は恐わがつてよりつかなくなる。どうしても縁遠くなつてしまうから、貴女の大学行きは大反対よ。伯母さんは貴方が可愛いいから、そう言うんですよ。女と言うものは器量がよくて、おとなしくて、そして機転のきくのが男に好かれる秘けつ、学問なんか女には毒ですよ。」

この親切な伯母さんは、全然進学能力のない自分の息子に

「男はどうしても大学を出なければ、社会に出ても顔が立たないから、石にかじりついてでも大学に入るんですよ。」

と言い続けて、息子の顔を憂鬱にさせている。

次は長屋住居の私の話である。

私の留守に訪ねて来た人が、子供から私の行き先を聞いて、それを人に話したことが廻り廻つて、本人の私に帰つて来た。

「議会の傍聴に行くなんて生意気ね。あんなところに行つて何が面白いのか知ら……もつとも映画なら入場券がいるから、流石に倹約家のおかみさんだけあるわ。」

その人は選挙の時、私達の間を平身低頭して泳ぎ廻つた。

「是非お頼みします。私の親戚ですから、皆さんの何かのお役に立つこともありますから、是非当選させてやつて下さい。」

その人の推薦候補者は幸に当選して、私の見て来た議会で徹頭徹尾舟を漕いでいた。私が投票した人は徹頭徹尾野次ることだけの政治家だつた。男女同権、女にも選挙権を……と与えられた選挙権で私は野次ることだけが能力の政治家を選出し、或人は議事堂を白河夜舟の場所と考えている政治家を選出しているのだ。そして議会の傍聴など、長屋のおかみさんがしてはおかしいと女同志の間で思われている。

次も私の話である。

主婦の朝は戦場である。子供達の各自の言い分の包囲攻撃を受けながら、朝の食卓が出来るが、主人が起きて来ない。再三、再四子供が代る〳〵起こしに行くがらちがあかない。そこで、主婦が起こしに行くと

「うるさい！」と大きな雷が落ちる。その癖その後で時計を眺めて

「何故早く起こさないのだ。七時に起こせとあれ程言つているのが分らないのか。馬鹿ッ！」

そして主人は裕々と新聞を読み、食事をして勤めに出て行く。

夕飯時、ラジオで聞いた話をつい出して見る。

「仏印はどうなるんでしようね。」

「どうなるッたつて、仏印がお前に援助を頼みに来やしませんよ。それよりも少しは片附けたらどうかね。一体一日何をしてるんだ。」

と又雷が落ちる。一日何をしているか？　炊事、洗濯、掃除、裁縫に追いまくられ、新聞一枚落ちついて読めないと言うことは、結局自分の頭が悪くて時間の使い方に原因するからと言うことになるが、主人は主婦のこの炊事、洗濯、掃除、裁縫は飽く迄女のつとめであつて、労

働ではないと思つていることが言葉の端によく出て来る。一家協力して家事にあたつてくれたら主婦はどんなにか助かりもするし、教養の時間が多分に与えられることになるだろうに。

次は近所の或る社用族階級の話である。

最近華やかな夫人の眉間に深い皺が刻まれ初めた。幾夜も帰らぬ夫を、「会社が忙しいので会社に泊つていますので……」と言う夫人の心根は非常にいじらしい。その夫人がかばつてやつた夫と言うのは、「遊興出来るのは男の力だ。俺のすることに女が一々干渉するな。女房は家と子供にしがみついて居れば良いのだ。」と、今夜も帰らぬ夫を待つその夫人に、女の悲しい地位を感じる。迷う男が悪いのか、迷わせる女が悪いのか。街のあちらこちらに脂粉の女が戦後ぐつと増えて来た。家庭を根城とする女にとつて愛する夫を同性の彼女達に奪われまいとする悲しい闘いは、この夫人許りではない。そして夫が放蕩するのは原因がその妻に被せられてしまうのは、昔も今も少しも変りがない。

終戦後、男女同権だと言う有難いお題目の下に、女の地位は高まつただろうか。或人は言う。「人の前で意見をどし〳〵述べられるようになつたことだ。」と、然しこれとても「あんまりしやべるとみつともないぞ。女の癖に。」と言われる。

こうして女はより高い地位を確保しようと思いながらも、この「女の癖」にと事々に言われて、動かぬエスカレーターに何時迄も默つて甞つている婦人が多いのではあるまいか。

婦人の地位は高まつたか

——半農半都市の一地方に生活して——

眞田龜久代
（宮崎県）

こうした問題を考えてみる場合、すぐに私の胸に、一連の詩句のように思いうかぶ、宮本百合子のことばがある。

「人間の進歩ということを考える場合にも、いくら一握りの青年が前進しても、その半身である若い女性が遲れていたら、その互いの不幸は深いと思います。」——この短い一くさりの言葉の中にこめられた切々たる悲願を読みとらない人がいたら悲しい。

互いの不幸——男だけの不幸でもなく、女だけの不幸でもない、互いの不幸を、今、私達は、男女互いに、しんから思いみあつているだろうか。この不幸を救いたい故に、婦人週間も

あるのではないか。婦人の地位を云々する一歩手前に、この根底の精神的理解が互いに深まつて来たかどうかを洗つてみなければならない。

事実はどうであろう。相変らず、女性は、因習と家事の重圧から、この不幸をしみじみと思ういとまもなく、男性もまた、長い間の封建性から脱却し得ないで、男子優越の感情を、かたくなに持ちつづけて止むことを知らない。

「女性は、人間的成長の面でも、その他、あらゆる面に於ても、男性に立ちおくれている。いや、女は生れながらに、男より素質が低いのだから、婦人の地位を高めたいなら、それを解決してからのことだ。」という同情のない言葉が、常に横行するのである。家庭の主婦にむかつては、その成長を助けようとするのでなく、「女房はえらくならぬ方がいい。」であり、「女房が生活力を持たぬ方が、家庭の平和が保てる。」というのが、まだまだ、一般の男性の持論なのである。

婦人週間の、ささやかな行事に参加する主婦より、そんな行事のある日にも、朝から日暮れまで、ぼろ繕ぎ、水汲み、風呂焚きと、寸刻の暇もなく終日を送り、夫を迎える女房の方が、悪評を受けない。

「女は女らしく」といい、「女には女の場がある」という。美しく曖昧な考え方の上に婦人は安住させられる。だから地方の婦人団体の仕事といえば、去年も今年も台所改善である。それも、地に足をつけた、主婦の工夫や創意になる改善でなく、右往左往の改善である。昨日は何々式竈、今日は何々式流しである。

男性の優越感からくる婦人の進歩の阻害は婦人の抵抗が高まれば高まる程、執拗に加えられている。地方の婦人団体の研究会などで、男子来賓の挨拶をきくといい。

「はなばなしい婦人運動、行き過ぎた、婦人の社会活動は、私は感服いたしません。しかるに当地の婦人会におかせられては、台所の改善、栄養の研究等に集中せられ、婦人の婦人としての道に研鑽を積まれていることは敬服の至りであります。」――婦人は、ある一定の線からはみ出してはならぬという挨拶が、必ずあるのである。婦人の成長が、あらゆる生活の広い面にわたつて、お互いの幸福に欠くことの出来ないものであるという挨拶は、殆んどきかれないのである。

も一つ、これはごく地方的な現れであつたかも知れないけれど、今年の高校進学に際して、この地方では、女子の普通科進学が、極力奨励されなかつた。女子は家庭科へ進学せよという

のである。入学後の男女の能力差をあげて、男子優越を語られる先生があつた。共学になつて、普通科に女子が混ぜられたことによつて、男子の学力が低下するという根拠のない見方をする人もある。若い女性の成長に対して、ここにも愛情はふさがれようとしている。

雑駁な家事処理も、豊かに磨かれた知性を基とするなら、今よりはるかにうまく処理され、すべての女性が、思索の暇も、研究の時間も生み得て、進歩することが出来るのである。そこから、はじめて、美しく、高く、愛情にみちた家庭が築かれ、美しく、高く、愛情にみちた社会が生れて来るのではないだろうか。

婦人の地位は高まつたごとく見えて、高まつてはいない。その根底に、男性の、着実な愛情と理解の裏付けのない、外形ばかりの高まり方では、眞に高まつたとは云えないと思う。

このパンフレットの増刷、転載を希望される向は労働省婦人少年局又は各都道府県婦人少年室に御連絡下さい。

昭和28年7月25日　印　刷
昭和28年7月31日　発　行

婦人の地位は高まったか

編集兼発行人　東京都千代田区大手町1丁目7番地
労働省婦人少年局

印刷所　東京都中央区入船町2丁目3番地
永井印刷工業株式会社